

# クロスロード

5

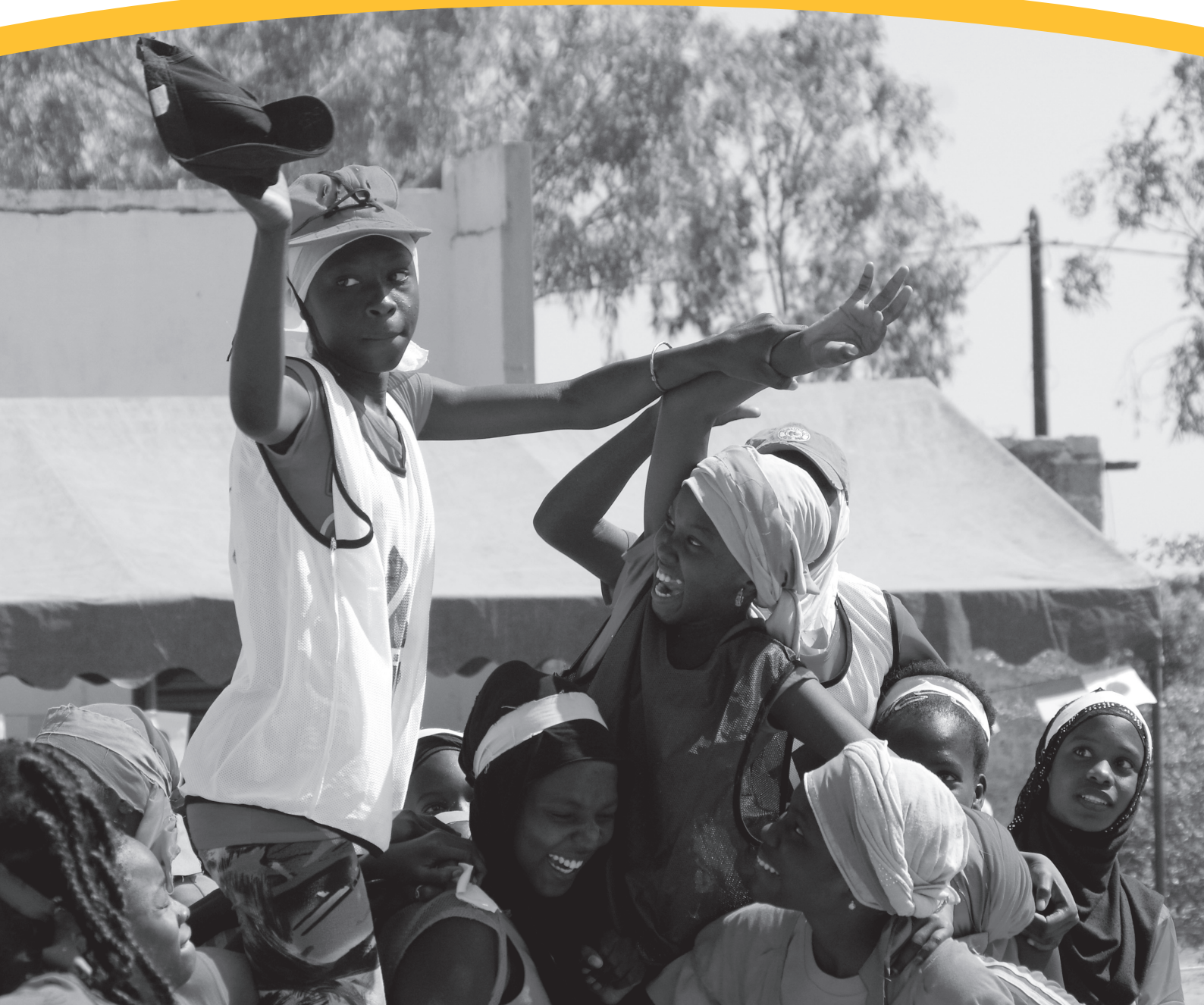


特集1

学校教育分野の活動ポイント

特集2

“任期終盤”の心構え



現在の派遣国数

75 カ国



# JICA海外協力隊 派遣現況

(2020年3月末現在、単位：人)

## ■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	45	2
エスワティニ	1	
エチオピア	16	
ガーナ	52	
ガボン	14	3
カメルーン	26	2
ケニア	35	3
ザンビア	50	5
ジブチ	13	
ジンバブエ	8	
セネガル	38	1
タンザニア	56	2
ナミビア	11	
ベナン	36	
ボツワナ	16	
マダガスカル	29	
マラウイ	29	
南アフリカ共和国	6	4
モザンビーク	30	1
ルワンダ	36	

## ■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	20	
インドネシア	14	1
ウズベキスタン	23	5
カンボジア	18	2
キルギス	28	1
タイ	19	4
タジキスタン		2
中華人民共和国	11	
ネパール	32	4
東ティモール	36	
フィリピン	29	2
ブータン	15	4
ベトナム	27	9
マレーシア	14	5
ミャンマー	17	2
モルディブ	9	
モンゴル	35	
ラオス	37	

## ■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	3	
サモア	15	1
ソロモン	20	1
トンガ	17	
バヌアツ	23	
パプアニューギニア	21	1
パラオ	9	5
フィジー	21	3
マーシャル	7	3
ミクロネシア	14	4

## ■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	2

## ■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	15	2
チュニジア	6	
モロッコ	20	3
ヨルダン	38	1

## ■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア	
アルゼンチン		14	6	5	
ウルグアイ		2			
エクアドル	35	2			
エルサルバドル	16				
キューバ		1			
グアテマラ	22	1			
コスタリカ	27	6			
コロンビア	14	6			
ジャマイカ	21	3			
セントビンセント	3				
セントルシア	8				
チリ		1			
ドミニカ共和国	27		4	1	
ニカラグア	2				
パナマ	16	2			
パラグアイ	31	2	6	3	
ブラジル				69	12
ベリーズ	14				
ペルー	37	7			
ボリビア	32		1	1	
ホンジュラス	23				
メキシコ	2	6			

## ■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,493 (633/860)	143 (107/36)	86 (33/53)	22 (9/13)	1,744 (782/962)
累計 (男性/女性)	45,776 (24,302/21,474)	6,553 (5,298/1,255)	1,542 (597/945)	547 (252/295)	54,418 (30,449/23,969)

一般＝青年海外協力隊/海外協力隊

シニア＝シニア海外協力隊

日系一般＝日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

# クロスロード

2020 MAY  
Contents

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	16
村落開発普及員	26
上水道	24
化学・応用化学	25
青少年活動	14
レスリング	18
柔道	35
音楽	28
珠算	4
体育	8
小学校教育	6、10
美容師	20
看護師	4
栄養士	22

■国別索引	掲載ページ
カンボジア	4
ケニア	14
セネガル	8
トンガ	4
ネパール	24
バヌアツ	26
パラグアイ	18
ベトナム	25
ベナン	6
ペルー	22、35
ボリビア	20
ホンジュラス	10
モザンビーク	16

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	14
埼玉県	25
千葉県	8
京都府	22
大阪府	18、20
奈良県	10、16
佐賀県	6
長崎県	35
宮崎県	26
鹿児島県	24

## 【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

### 国際協子さん(ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊)

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株)AND

レイアウト：(株)AND

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

## JICA Volunteers' NEWS

▶配属先病院で初となるホスピタリティーに関する研修を実施(カンボジア)

▶第10回「トンガ王国そろばん全国大会」～そろばんで結ばれるトンガと日本の絆～(トンガ)

特集1

## 学校教育分野の活動ポイント

6

### CASE 1

武藤雄星さん(ベナン・小学校教育・2017年度1次隊)

8

### CASE 2

高橋旺子さん(セネガル・体育・2017年度1次隊)

10

### CASE 3

土井誠人さん(ホンジュラス・小学校教育・2017年度1次隊)

12

## 活動Q&A集

特集2

## “任期終盤”の心構え

14

### CASE 1

高橋哲弥さん(ケニア・青少年活動・2017年度2次隊)

16

### CASE 2

山本拓功さん(モザンビーク・コミュニティ開発・2017年度2次隊)

18

### CASE 3

小来田広志さん(パラグアイ・レスリング・2017年度2次隊)

20

### CASE 4

松尾まどかさん(ボリビア・美容師・2017年度2次隊)

22

## “失敗”から学ぶ

大塚歩美さん(ペルー・栄養士・2017年度3次隊)

24

## 希少職種図鑑

▶上水道 南智大さん(ネパール・2017年度3次隊)

▶化学・応用化学 松澤貞夫さん(シニア海外ボランティア/ベトナム・2017年度2次隊)

26

## JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

社会福祉法人の職員 井口雄介さん(バヌアツ・村落開発普及員・2009年度3次隊)

28

## 帰国後よもやま話

音楽隊員篇

30

## JICA海外協力隊的プチテクガイド

BANANA PAPER MAKING/学校菜園/身近なもので理科実験

32

## INFORMATION

34

## JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「洗濯」

35

## JOCV SPORTS NEWS

36

## 隊員めし

オープンいらずのスィーツ クルクル回してパウムクーヘン





多くの協力のもと実現した研修会。小林さんは主体的に参加してもらえよう、研修中は多くの参加者に意見を求めた

開催までの流れ	
〈1年前〉 赴任時要請ヒアリング	院長とミーティング。「ホスピタリティー指導」の要請を受ける。
〈1カ月前まで〉 情報収集・カウンターパート探し	日々医療現場を視察。日本とカンボジアの医療や価値観の違いを知る。
〈1カ月前〉 提案	院長とミーティング。JICA専門家とホスピタリティー研修の提案を行う。
〈3週間前〉 企画・準備	研修のテーマについて現地スタッフとミーティング。プレゼン資料作成。
〈2週間前〉 研修準備①	プレゼン資料をもとにディスカッション。資料を修正。
〈1週間前〉 研修準備②	研修の流れの確認や役割分担。ロールプレイの練習。
〈当日〉 研修実施	第1回ホスピタリティー研修開催。

## 配属先病院で初となる ホスピタリティーに関する研修を実施

Cambodia

文 = 小林明日香さん (カンボジア・看護師・2018年度2次隊)

私は看護師隊員3代目として、コンボンチャム州内で最高レベルの医療機関であるコンボンチャム州病院に配属され、「5S・KAIZEN活動」「感染予防活動」を前任者より引き継ぎ活動しています。それらに加え、赴任当初からの院長の強い要望により、新たに「ホスピタリティー指導」をテーマにした活動を開始しました。

この1年、実際に現場を視察していると、医療処置はきちんと提供できている反面、処置時に患者さんに対する声掛けや、「お大事に」というひと言が欠けていると感じる場面が多くありました。一般に「ホスピタリティー」とは、「思いやり」「おもてなし」「歓待」といった意味があります。ホスピタルの語源もここからきており、病院におけるホスピタリティーとは、ただサービス（医療処置）を提供するだけではなく、相手に心を込めて接すること（ケア）



現場に生かすためのロールプレイ。「スタッフの女優魂を感じました」と小林さんは振り返る

が含まれていると私は考えています。とはいえ、一概に「ホスピタリティー」と言っても、抽象的である上、指導内容のマニュアルもありません。ましてや、国が違えば文化も価値観も違います。正しい答えがないテーマだからこそ、その指導方法にとっても悩みました。そこで、院長をはじめとした現地スタッフとのコミュニケーションや、他の看護師隊員・JICA専門家などにも相談し、多くの人の意見を聞く機会を大切にしました。

そして、病棟長（医師）と病棟師長（看護師）約80人を対象に第1回ホスピタリティー研修を開催することができました。テーマは「対人コミュニケーションの基本」と「身だしなみ」。私自身も講師として参加しました。学んだ知識を行動に生かすことができると、ロールプレイを取り入れたところ、非常に盛り上がりました。

研修後アンケートでは、一部スタッフから「笑顔で対応することや、ありがとうのひと言、はとでも簡単であり、ホスピタリティーは難しいことではないとわかった。これから意識したい」という回答を得ることができました。その小さな意識や行動の変化の積み重ねが患者さんからの信頼の獲得、そしてより質の高い医療の提供を可能にすると私は信じています。

今後も「地域から信頼される病院をつくる」ことを目標に、現地スタッフと力を合わせてカンボジアと日本のいいところをミックスした研修を実施していきたいと考えています。

\*5S-KAIZEN…5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）を定義させることで業務環境を改善すること。

開催までの流れ	
〈6カ月前〉 選手選抜	地方大会の結果をまとめ、上位3割の生徒を選抜。
〈5カ月前〉 練習	学校に赴き、大会練習の補助を開始。
〈4カ月前〉 企画	在トンガ日本大使館へ赴き、大会の開催方法を確認。
〈3カ月前〉 問題作成・配布	本番用・練習用問題を作成し、年始の会議にて練習用問題を配布。
〈2カ月前〉 練習	同僚と授業後特別クラスを開始。
〈前日〉 会議	大会役員を担う先生に対して説明会を実施。
〈当日〉 運営	教育省職員、先生と協力してそろばん全国大会を開催。
〈1日後〉 会議	教育大臣、教育省CEOとそろばん大会やそろばん教育の今後について話し合う。



そろばんをはじく音しかしない会場で暗算とそろばんを用い黙々と問題を解いていく参加者。「問題に正解するととても嬉しい！」と生徒たちはそろばんを楽しんでいる

## 第10回『トンガ王国そろばん全国大会』 ～そろばんで結ばれるトンガと日本の絆～

Tonga

文 = 前田大志さん (トンガ・珠算・2018年度3次隊)

私は2019年1月から珠算隊員としてトンガ王国教育訓練省学習指導課に派遣されています。私たち珠算隊員の派遣は1989年に始まりました。そろばん隊員は教員養成学校でそろばんの授業を担うとともに、教育省でカリキュラム策定、パイロット授業の実施など算数能力向上を目指すそろばん教育の土台づくりを行いました。長年の協力が実を結び、2009年に珠算は小学校3年生から5年生における算数の必修単元となりました。私はそろばん教育の質向上を目標に、学校巡回による授業補助やそろばん大会運営、教科書作成の補助を行っています。

私の所属する教育訓練省は、在トンガ日本国大使館と共催で11年よりそろばん全国大会を開催しています。今年の3月12日に開催された2020年度大会は、記念すべき10度目の全国大会でした。本大会には、前年度に行われたそろばん地方大会で



大会後に大使公邸で行われたレセプションでの集合写真。大会に向けた働きを皆で思い合った

優秀な成績を残した小学校4、5年生約200人が参加し、個人戦と地区の意地をかけた団体戦で熱い火花を散らしました。そろばん大会の運営と発展には、教育省の協力が欠かせません。採点や問題配布、整列の補助を行う先生に確実に情報伝達を行うことが大会成功のカギとなります。大会前日に大会役員ミーティングを行い、大会当日も全員に対して各個人の役割を再確認したり、頻りに声をかけたりした結果、円滑に大会を進行することができ、締まりのある大会になりました。

また、同僚の1人から「大会に向けた特訓のできていない生徒を集めて、一緒にそろばんを教えよう」と提案をいただき、2カ月間練習会を開きました。同僚との信頼関係が構築できていることを確認でき、大変嬉しい出来事でした。さらに、指導をした生徒の内3人が入賞し、誇らしい表情で賞状やメダルを受け取る姿を見たときは、格別の喜びを感じました。

本大会には石井哲也特命全権大使をはじめ教育大臣と教育訓練省CEOにもご臨席を賜りました。大会後に開かれたミーティングでは、教育大臣と教育訓練省CEOより「集中してそろばんに取り組み、3桁の加減算を暗算で行う生徒に感謝した。あなたは素晴らしい仕事をしている」と労いの言葉をいただきました。来年度も生徒に学びと競い合う楽しさを、参観者に感動を届けられる大会を開催できるように精一杯活動をしていきたいと思えます。



# 学校教育分野の活動ポイント

学校教育の質向上を支援する活動では、「主要教科に比べ、技能教科が軽視されてしまう」「教材や道具が不足している」といった共通の困難が存在する。そうしたなか、協力隊員の立場で果たし得る役割は何か？ 活動事例を通してそのポイントを整理する。

小学校における図工授業の質向上に取り組んだ武藤さん。「主要教科を優先する」という現地教員たちの傾向を改善できないなか、図工授業活性化のキーパーソンとなってくれたのは、教員ではない住民だった。

## case 1

### 武藤雄星さんの事例

(Muto Yusei)

ベナン・小学校教育・2017年度1次隊

#### PROFILE

1993年生まれ、佐賀県出身。大学卒業後、社会科の講師として中高一貫校に勤務。2017年7月に青年海外協力隊員としてベナンに赴任。19年7月に帰国。

#### 活動概要

バラクーI視学官事務所(ボルグー県バラクー市)に配属され、図工授業に関する主に以下の活動に従事。  
●小学校での授業の実施  
●教員に向けた研修会の実施  
●デッサン大会の開催



## 「学校の外」に、図工の活性化を担うキーパーソンを獲得

武藤さんの配属先は、ベナン中部の最大都市・ボルグー県バラクー市にある2つの視学官事務所のうちの1つ。配属先が管轄する幼稚園や小学校を対象に、技能教科の音楽・図工・体育や算数の授業の質向上に向けた支援をすることが、主要な申請内容だった。着任するとまず、配属先の近くにある小学校(以下、A校)に通って授業を見学。各教員が1つのクラスの全教科を受け持つ「学級担任制」がとられていたが、彼らには共通して見られる傾向があった。カリキュラムには技能教科が組み込まれていないものの、フランス語や算数などの主要教科は力を入れていることだ。なかには授業を行っていない教員もいた。技能教科は卒業時の国の統一試験で配点が低く、出題内容も易しいことが、その最大の要因と見られた。

最初の活動の場としたのはA校だ。同校の教員たちが行っていた図工の授業は「デッサン」ばかりになっていた。しかも、教員が黒板に描いた「カバン」や「車」などの絵を写させる、一種の「模写」に終始し、実物を見てデッサンさせるということをしなかった。児童の力の評価は、「いかに手本を忠実に写すことができるか」を基準になされていた。

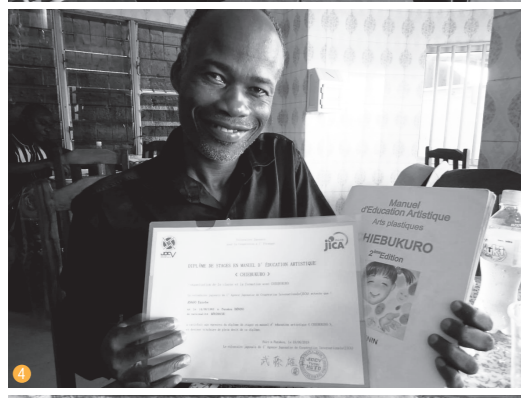
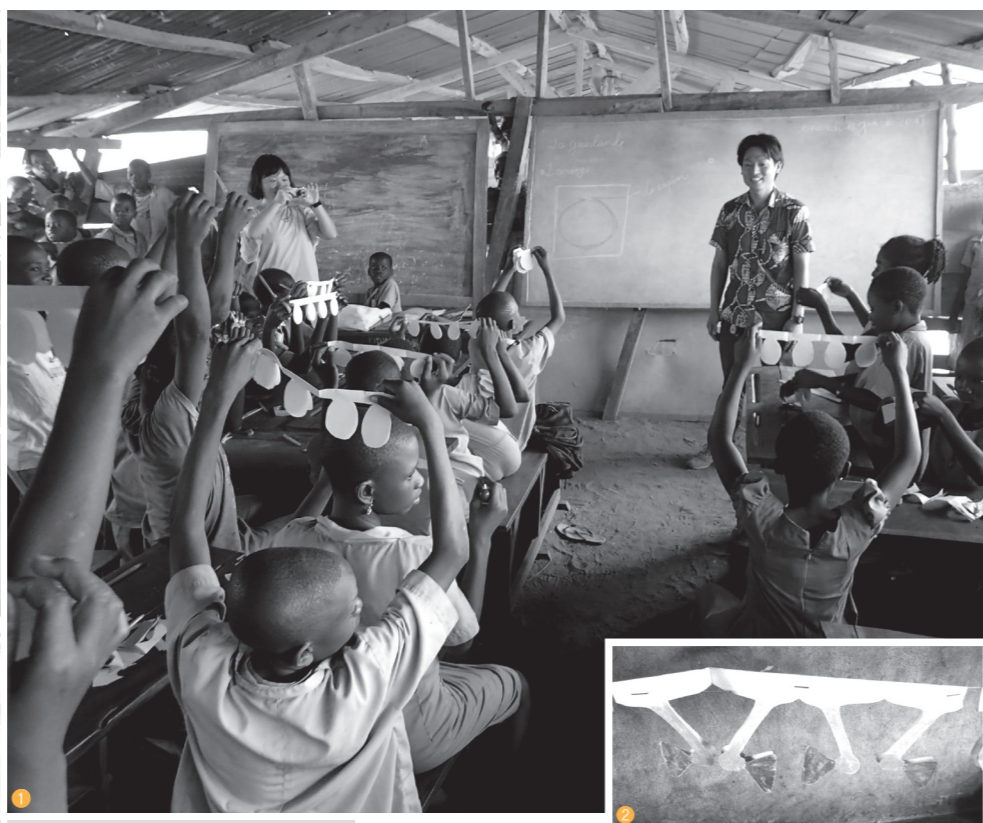
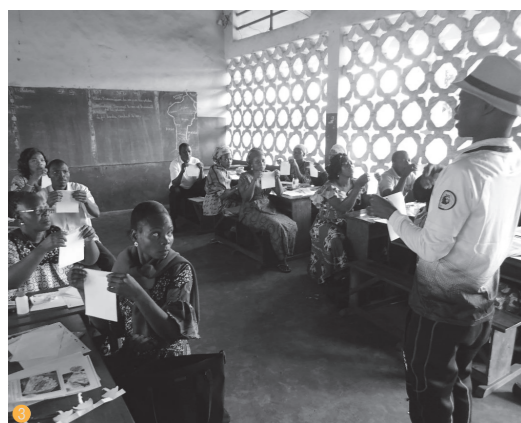
そうしたなか、武藤さんは主に4、5年生の図工の授業に入り、「想像する力」や「想像したものゝ形に表現する力」など、図工教育で本来養われるべき力の獲得につながるような活動を展開した。A校の校長が巡回指導の打診を行い、受け入れに積極的な姿勢を示してくれた校長の学校がメインだ。武藤さんは各校を週に1回ずつ回り、A校のときと同様、図工授業に入っ

### 図工活性化のキーパーソンに

にするなど、日本への興味が強い人物だった。職業は病院の薬局の事務員。本職のかたわら、図書館で子どもたちにアクティビティを提供するボランティア活動もしているとのことだ。図書館で図工教室を開くというアイデアも彼がくれたものだった。

ストライキが終わると、武藤さんは活動場所をA校を含む5つの小学校に拡大。所用で配属先を訪れる各校の校長たちに巡回指導の打診を行い、受け入れに積極的な姿勢を示してくれた校長の学校がメインだ。武藤さんは各校を週に1回ずつ回り、A校のときと同様、図工授業に入っ

重なることに彼の授業展開の力は伸びていくのだった。ベナンの小学校教育隊員たちによつて「指導書」の改訂版が完成したのは、武藤さんの任期の半ばごろだ。任期が終盤に入ると、武藤さんはその普及を目的とした研修会を任地で3度にわたって開いた。1回目の対象者は複数の小学校の教員約10人。2、3回目は、それぞれ異なる大規模校の教員約20人ずつを対象とした。この研修会では、Bさんに講師を務めてもらった。図工授業に対するモチベーションの高さや、その実践経験の豊かさといった点で、それまで武藤さんがかかわってきたどの教員よりもBさんは突出しており、彼こそ、武藤さんが帰国した後の任地における図工教育のキーパーソンになってもらいたいと考えたからだ。



1 ガーランドづくりの授業を行う武藤さん  
2 教員対象の研修会の受講者がその後、自らのアイデアにより授業で制作課題とした「鎌」のガーランド  
3 研修会で講師を務めるBさん  
4 武藤さんから授与された「指導書」と「修了証書」を手にするBさん  
5 任期の終盤に武藤さんが開いた「デッサン大会」での作品を手にするA校の児童たち

が、回を重ねるうちに図工への関心を高め、アクティビティを熱心に習得するようになっていった。当初はよく遅刻をするなど、日本人への興味だけから図工教室に協力してくれている様子だった。ところが、回を重ねるうちに図工への関心を高め、アクティビティを熱心に習得するようになっていった。

武藤さんは帰国時、「指導書」を使った図工授業の訓練の「修了証書」を自作し、「指導書」の实物とともにBさんに授与。帰国後は、彼から武藤さんのもとに「小学校に赴き、図工授業を行った」といった報告が届いているという。

\* ガーランド…「国旗」など同じ形態の物を紐状につないだ装飾。



## 特集1 学校教育分野の 活動ポイント

高橋さんの配属先は、市の教育行政を所管する機関。市内の小・中学校における体育教育の質向上を支援することが、求められていた役割だった。

### 体育授業の実践からスタート

着任の約一カ月後に新年度が始まると、体育授業の実態の把握と活動場所の開拓を目的に、小・中学校への訪問を開始。すると、中学校では体育授業が行われているが、小学校では行われていないことがわかった。小学校のカリキュラムでは体育授業が週に1コマ設けられていたが、卒業時に受ける国の統一試験で配点が低く、「成績付け」の対象にもなっていないことが、その背景にあるようだった。そうして小学校を活動場所にしように考えたが、校長自身が体

に、A校の5、6年生の担任教員を招き、先輩隊員が行う運動会のデモンストレーションを見てもらった。

②その約一カ月後、先輩隊員が活動先の小学校で実施した運動会を、A校の6年生の担任教員と共に見学。

③①と②と並行して、A校の校長に運動会開催の意義を説明。①②で運動会の実物を見た教員たちには、その感想を校長に伝えてもらった。

そうして運動会が実現したのは、翌3学期の半ばである。組分けはPCMEと同様、各学年を緑・黄・赤の3組に分けた。種目は高橋さんが考えた案を教員たちに提示し、話し合いのうえで決定。玉入れ、綱引き、棒引き、障害物競走、二人三脚、騎馬戦が選ばれた。

教員たちの取り組む姿勢はおおむね期待どおりだった。本番の一カ月前から、高橋さんも加わって全学年のクラスで運動会の種目の練習を行う体育授業が実現。当日は配属先の視学官や保護者など幅広い来賓が集まり、盛大なイベントとなった。しかし、高橋さんの期待は裏切られてしまう。運動会を終えた後、A校で自発的に体育授業を継続しようとする教員が現れなかったのだ。

「体育授業はあなたがやるものでしよう」。新年度に入ってそんなことを口にするA校の教員がいたことから、高橋さんはたまたま校長に相談。高橋さんの熱意を受け取った校長は、職員会議でこう発言した。「マゲ

## case 2

### 高橋旺子さんの事例 (Takahashi Akiko)

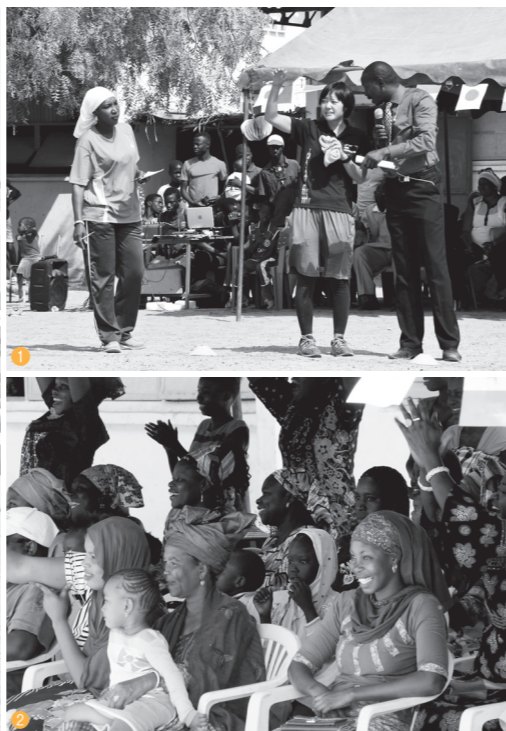
セネガル・体育・2017年度1次隊

#### PROFILE

1994年生まれ、千葉県出身。東京学芸大学教育学部(中等教育教員養成課程保健体育科専攻)を卒業。2017年7月に青年海外協力隊員としてセネガルに赴任。19年7月に帰国。

#### 活動概要

ティエス市教育委員会(ティエス州ティエス県)に配属され、主に以下の活動に従事。  
●小学校における体育授業の実施  
●体育授業の教員向け教材の作成  
●「運動会」の企画・運営



## 現地教員の「競争」への熱意を 体育授業への興味につなげる

地方の教育行政機関に配属され、体育授業の活性化に取り組んだ高橋さん。現地教員の体育授業への軽視があったなか、「競争心」をくすぐることで彼らの体育授業に対する関心を引き出そうと試みた。

育授業を軽視している学校が大半で、「体育授業を行わせてほしい」というリクエストはなかなか受け入れてもらえない。唯一、校長が快い返事をしてくれた1校(以下、A校)で活動を開始することができたのは、2学期に入ってからだ。

A校には、50〜80人程度のクラスが各学年に1つずつあった。従来、いずれのクラスでも体育授業は行っていないとのことだったが、高橋さんは最高学年の6年生のクラスで担任教員とともに体育授業を実施させてもらえることとなった。クラスの人数は約50人。総じて1クラスの人数が多いセネガルでは、そうした状況を踏まえて政府がつくったPCMEという体育授業の方式が存在する。クラスを国旗の色である緑・黄・赤の3チームに分け、複数のチーム対抗試合を同時に進めるというものだ。PCMEは教員資格の認定試験にも含まれており、正規の教員はみなその知識は持っていることから、高橋さんはPCMEを踏襲しつつ、現地教員がやり方を知らない競技を導入するという授業方針を立てた。

授業で最初に行った競技はドッジボールだ。担任教員にはまず、補助役として授業に入ってもらい、次第に主役になってもらうとう考えた。しかし、児童は嬉々として授業に取り組んでくれるが、担任教員は回を重ねても一向に体育授業への意欲が高まる様子が見られなかった。

転機が訪れたのは、授業実践を開始して一カ月ほど経ったころである。6年生の体育授業を見て興味を持った5年生の児童から「自分たちもやりたい」との声が上がり、5年生のクラスでも体育授業を行うこととなった。最初に行った競技はやはりドッジボール。そこで高橋さんが両クラスの担任教員に提案したのは、次の競技に移る前に、「まとめ」として「クラス対抗試合」を行うことだった。すると、両教員の体育授業への姿勢が変化。児童への指導に熱を入れるようになったのだ。

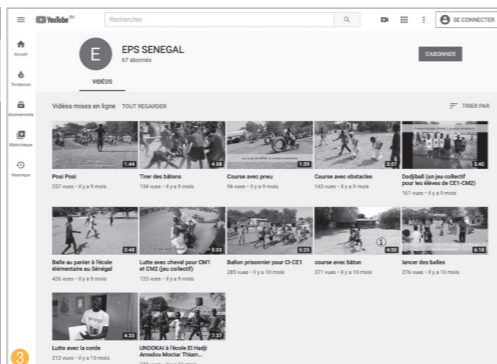
「競争心」こそ、体育授業に対する教員たちの意欲を刺激する鍵。そう感じた高橋さんが着想したのは、勝ち負けがある「運動会」の開催によって、体育授業活性化のテコ入れをするというアイデアだ。セネガルの先輩隊員を含め、体育授業の質向上に取り組む協力隊員が運動会を開催している例は知っていたが、その意義に納得がいったのだった。

### 「運動会」を起爆剤とする試み

幸運も重なり、以下のようなステップでA校での運動会開催が決まったのは、2学期の終わりである。

①5年生のクラスで体育授業を開始して一カ月ほど経ったころ、教育分野の活動をするセネガルの協力隊員たちが現地の人たちに自分たちの活動を紹介するイベントを開催。そこでトット(高橋さんのニックネーム)は体育の授業をしに来ているのではない。体育授業は担任教員がやるものだ。すると、程度の差はあれ、ようやくA校のすべての教員が高橋さんと共に体育を実践するようになった。彼らの意識の変化を読み取ることでできたのは、教員たちが「ジャージ」を着て体育授業に臨むようになってくれたことだ。女性の行動に制約が多いイスラム教が主流の任地において、男子と同様に体を動かす「体育教育」が女性の生き方の可能性を広げる手段として有意義だと高橋さんは感じていたが、女性教員までもが「ジャージ」で体育授業に臨む姿は、体育教育を活性化させる意義を再確認させてくれた。そうして体育授業に積極性を見せる教員が現れたことで、任期の終盤にはA校で2回目の運動会が実現した。

- 1 A校で行った2回目の運動会のひとコマ。MCを担当する教員は「礼儀だから」とネクタイ姿だったが、ほかの教員はみなジャージで臨んできた
- 2 開催した運動会は配属先のスタッフや保護者などが参観。「イベント」としての盛り上がりを見せた
- 3 体育授業の実践例をアップロードしたオリジナルのYouTubeチャンネル「EPS SENEGAL」(\*)
- 4 A校で行った運動会で「台風の目」に取り組む小学3年生の児童。道具は既製品が揃っているわけではないため、伝統布を売る店に譲ってもらった布を巻く紙筒を棒引きの棒に使うなど工夫した
- 5 YouTubeにアップロードした「中当て」の実践例



\* <https://www.youtube.com/channel/UCMs2JuW8rcHGBJGEIHKQ0zg>

高橋さんが任期終盤に「帰国後」を見据えて取り組んだのは、体育授業に熱心になったA校の教員の授業を動画に収め、セネガルのより広い範囲の小学校教員たちにそれを観てもらおうと、YouTubeに設けたオリジナルのチャンネルにアップロードすることだ。任期中にアップロードが叶った動画は12本。現地で馴染みのSNS「WhatsApp」でも紹介して拡散を図った。帰国後、その動画教材を使って「運動会」の研修会を行ったという報告が、高橋さんのもとに届いているという。

\* PCME…「Procédé de Compétition Multiple par Equipes」(チーム対抗で複数競技を行う方法)の略。



## 特集1 学校教育分野の 活動ポイント

土井さんが配属されたのは、チヨルテカ県の教育行政を所管するホンジュラス教育省の出先機関。小学校の算数授業の質向上を支援すること、求められた役割だった。

最初に行った活動は、配属先から指定された小中一貫校（以下、A校）に通い、算数授業の現状とその課題を把握することだ。現地教員の授業を見学するなかで、課題がいくつか見えたが、そのひとつは「板書」の不適切さである。A校では算数の教科書が児童ひとりひとり行き渡っていないかった。そのため、板書を書き写したノートを教科書代わりにさせるべく、現地教員たちは教科書の記述をそのままホワイトボードに「転記」する。児童も機械的に板書をノートに書き写すことに終始してしまい、授業内容の理解がおざなりになっていた。

着任の約2カ月後に行われた算数の「共通学力テスト」では、児童の学力不足が鮮明に表れた。このテストはJICAの技術協力プロジェクトにより導入されたもので、ホンジュラスの小学校教育隊員が活動する学校で毎年度末、共通の問題により一斉に行われていた。出題内容は、教科書に載っている問題の数字だけを変えたような基本レベルのものだったが、A校の平均正答率は、2年生で4割ほど、3年生以上の学年では2割を下回るという結果だった。

このテストでは、現地教員の新たな課題も見つかった。試験監督としてカンニングを咎めなければいけなかった。自分のクラスの児童の点数を上げたいばかりに、「テスト」が持つ「その時点の学力を測り、課題を明確にする」という意義をないがしろにしてしまっているのだ。

### 「計算練習」と「単元テスト」

着任の4カ月後に新年度が始まると、土井さんは算数授業に入って改善に向けた働きかけをする活動に着手する。A校のほか、帰国した先輩隊員が前年度末まで活動していた小学校（以下、B校）を対象とした。

土井さんが導入を提案し、現地教員たちに受け入れてもらうことができた改善策のひとつは、「計算練習」の定例化だ。授業の冒頭で毎回、四則計算の問題をホワイトボードに5、

力不足が鮮明に表れた。このテストはJICAの技術協力プロジェクトにより導入されたもので、ホンジュラスの小学校教育隊員が活動する学校で毎年度末、共通の問題により一斉に行われていた。出題内容は、教科書に載っている問題の数字だけを変えたような基本レベルのものだったが、A校の平均正答率は、2年生で4割ほど、3年生以上の学年では2割を下回るという結果だった。

「板書」の方法については、以下のよう「ひな型」をつくり、それを主に「研修会」の形で現地教員たちに伝えていった。ひな型のベースとしたのは、ホンジュラスの小学校教育隊員たちで作成したものだ。

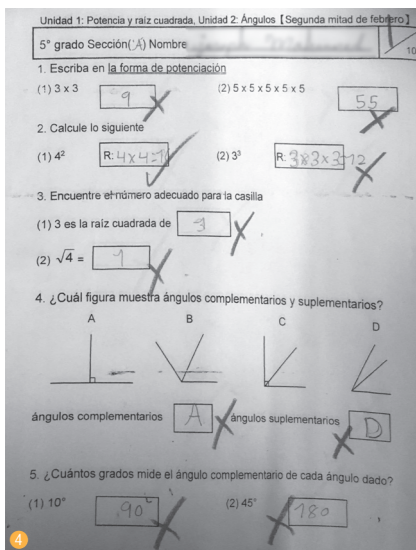
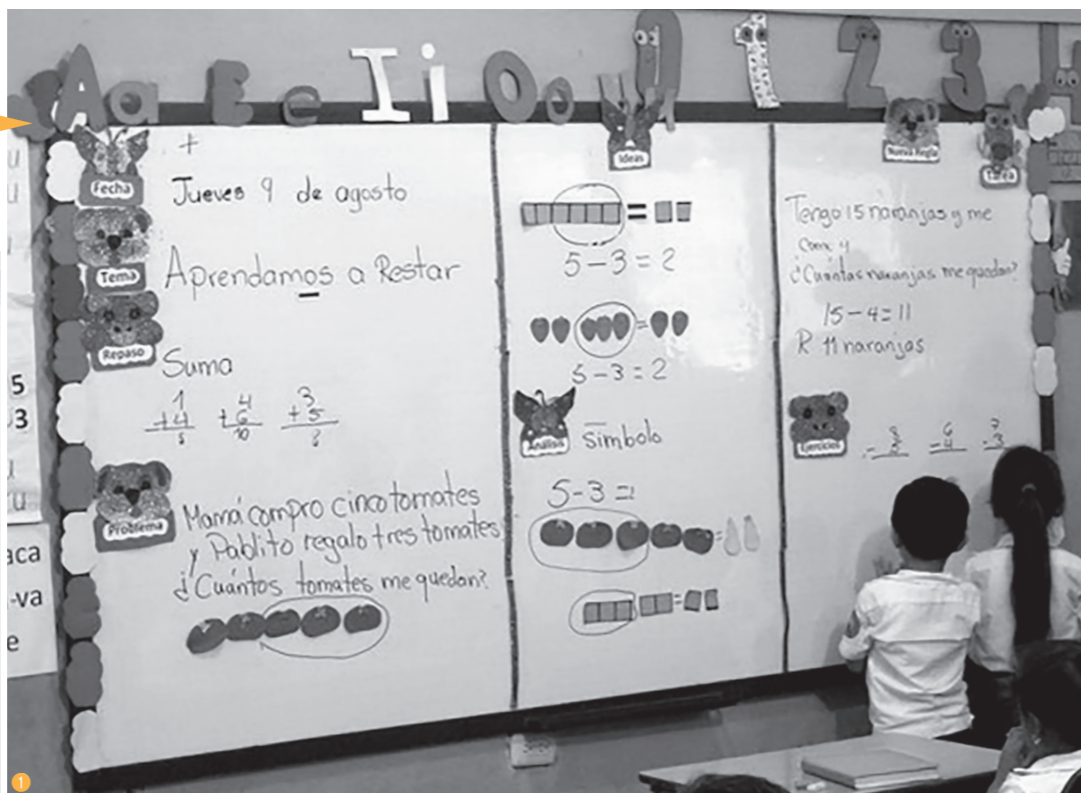
■ 授業中に書いたり消したりせず、一回の授業のすべての板書をホワイトボードの中に配置できるように、板書内容の取捨選択をする。

■ ホワイトボード全体を2行・3列の計6パートに区分し、それぞれに「授業の主題」「問題の例」「児童の考え」「考察」「まとめ」「練習問題」を書くものとする。

このひな形を紹介する研修会を最初に開いたのはA校とB校だ。着任の約半年後のことである。しかし、なかなか授業に取り入れてはもらえない。その原因は、ひな形を実際にどう活用するか、実践のイメージが湧かないことにあると考えた土井さんは、今度はひな形を使った「モデル授業」を見せる研修会を開催。すると案の定、受講者による実践が進み始めた。やがて、この研修会の意義を認めた配属先などからのリクエストにより、A校とB校以外の小・中学校でも、月に1、2回のペースで開催

### 【板書のレイアウト】

- |   |   |   |
|---|---|---|
| ① | ③ | ⑤ |
| ② | ④ | ⑥ |
- ① 授業の主題
  - ② 問題の例
  - ③ 児童の考え
  - ④ 考察
  - ⑤ まとめ
  - ⑥ 練習問題



- 1 土井さんが先輩隊員から継承し、提案した方法が取り入れられた現地教員の板書
- 2 板書を工夫した算数授業を行っていた他県の教員（中央）に講師を務めてもらった研修会
- 3 算数授業の冒頭に組み込まれるようになった「計算練習」に取り組む5年生の児童たち
- 4 導入した当初の単元テストの答案用紙例。9割の問題が不正解（ばつ印）であるこのような児童も珍しくなかった



## case 3

### 土井誠人さんの事例 (Doi Masato)

ホンジュラス・小学校教育・2017年度1次隊

#### PROFILE

1979年生まれ、奈良県出身。関西外国語大学外国語学部スペイン語学科を卒業後、英語科の教員として中学校に勤務。2017年7月に青年海外協力隊員としてホンジュラスに赴任（現職教員特別参加制度）。19年3月に帰国し、復職。

#### 活動概要

教育省チヨルテカ県教育事務所（チヨルテカ県チヨルテカ市）に配属され、小学校の算数授業に関する主に以下の活動に従事。  
● 授業改善の支援（「計算練習」や「単元テスト」の導入など）  
● 「板書」に関する教員向け研修会の実施

## 「授業参加」と「研修会」の両輪 で算数授業の質向上を支援

県を管轄する教育行政機関に配属された土井さん。現地教員が行う授業への参加と、彼らを対象とする研修会の実施という2つの方法を組み合わせながら、算数授業の改善に向けた働きかけを進めていった。

この改善策には、児童の学力向上を促すという狙い以外に、「テスト」が持つ「その時点の学力を測り、課題を明確にする」という意義を現地教員たちに理解してもらうという「裏の狙い」もあった。そのため土井さんは、「カンニングをさせない」「正答を教えない」といった「テストの基本」を徹底するよう、現地教員たちに説明。すると、次第に現地教員たちがそれを実践できるようになっていった。ただだけでなく、児童たちにもカンニングをしないようにする習慣が身に付いていった。そうして単元テストが「テスト」本来の姿で進められるようになる、児童には「テスト

するようになっていった。

研修会の受講者たちのなかには、「日本は子どもが優秀だから、そのような板書でも理解できるのだ」と口にする人もいた。そこで土井さんは、板書に工夫を凝らし、児童の学力向上につなげているホンジュラスの小学校の例を発掘しようと画策。手がかりとしたのは、前述の「共通学力テスト」だ。前年度に実施したすべての小学校の平均点を確認してみると、他県のある学校の平均点が比較的高かった。算数の教科担任が置かれている小学校だった。その学校で活動している協力隊員に撮影してもらった算数授業の動画を観たところ、協力隊員たちがつくった板書のひな型に近いものを実践していることが確認できたことから、その教員に講師役を依頼。任地の複数の学校の教員を集めた研修会でモデル授業を披露してもらうことが叶い、受講者たちの板書改善へとつなげることができたのだ。

「計算練習」や「単元テスト」、「計画的な板書」の導入など、土井さんの働きかけにより実現が進んだ算数授業の改善の影響は、任期の残りが半年ほどとなった時期にA校でも行われた「共通学力テスト」の平均正答率の上昇にも表れた。特に変化が顕著だったのは、前年度の正答率が1割を切っていた3年生で、3割程度にまで伸びたのだ。



特集1  
学校教育分野の  
活動ポイント

Q1

「数の概念を育てて  
確かな計算力を育てる  
指導について」

小学校教育隊員より

小学校で算数の指導をしています。子どもたちのなかには、6年生になっても計算をする際に指を使う子、丸を書く子、いつでも1から数える子、意味を理解していない子（「1+3=13」と答える）などがあります。10の合成は比較できていますが、数の分解については正答率が非常に低い結果でした。どのように指導したらよいでしょうか。

Q2

「子どものやる気を  
引き出していく  
体育の指導について」

小学校教育隊員より

小学校で体育の授業を担当しています。体育はこれまでしっかりとは行われてきていなかったため、任地の先生方に、学校全体で学期ごとに基礎運動、ベースボール型、ネット型、ゴール型を順番に行うことを提案し、進めることになりました。しかし、学年によっては先生が休んでしまったり、やりたくないという子がいたりします。どのように進めていけばよいでしょうか。

協力隊成果品  
Pick Up  
(学校教育分野)

JICA 海外協力隊員が作成する成果品については、その共有・活用の促進を目的に、JICA 青年海外協力隊事務局が「協力隊成果品」として登録・保管する制度を設けています。成果品の登録・活用を希望する場合は、在外事務所にご相談下さい。



●『EDUCATIONAL BOOK 紙芝居』

作者：バブアニューギニアの小学校教育隊員  
内容：啓発活動に使う紙芝居教材のシリーズ。「道徳」「健康」「授業態度」「環境」「ジェンダー」の5テーマのものがある。  
形態：PDFファイル・英語とビジン語

●『ENSEIGNEMENT DES ACTIVITES PRATIQUES DE L'EDUCATION D'EVEIL』

音楽・図工・体育の一般的な解説やアクティビティーの例をまとめた教員向け資料 (PDFファイル・フランス語/作=モロッコの小学校教育隊員)。

●『PE demonstration video in Maldives』

体育授業のアクティビティーを紹介する教員向け動画資料 (DVD・英語/作=モルディブの体育隊員)。

●『La petite clé』

現地教員による算数や技能教科の授業の優良事例や教材例、指導案例などを集めた教員向け資料 (PDFファイル・フランス語/作=ブルキナファソの小学校教育隊員)。

協力隊技術顧問が回答

活動Q&A集

JICA海外協力隊員への技術支援を目的に配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。



【回答者】

つるまきけいこ  
鶴巻景子さん

●JICA海外協力隊技術顧問  
(担当分野:小学校教育、  
教育行政・学校運営)

●元公立小学校長  
●東京学芸大学教職大学院 特命教授

A1

工夫しながら、一人一人の学習状況をしっかりと見取って分析していることは、とても素晴らしいです。数の概念を定着し、確かな計算の力をつける指導はとても大切です。

①数には、集合数と順序数があります。集合数とは、まとまりとして数をとらえることであり、順序数とは、順番を表す数字です。まず、数字を○やブロックなど半抽象のものに置き換えて、集合数として確実にとらえさせましょう。指は5のかたまりで、両手で10です。これほど優れた教材はありません。始めは、たくさん手を使って数をイメージさせることも大切です。また、○を書いたカードを常に使ってイメージをもたせるのも有効です。計算でつまづく子を見ると、数を順序数でとらえている子がいいます。○や棒をずつと書いて並べる子は、7は「7個のかたまり」ではなく、「7番目」という認識なのです。計算の基礎として、集合数として10ずつ書いたカードを活用するとよいでしょう。

②次に大事なことは合成・分解です。合成・分解の練習は、毎日行うことがよいです。クイズのように反応させることも大切です。7のカードで「10に足りない分はい



くつ?」とか、7は「4と○で7」と尋ねることで、7という数字を合わせたり、分解したりしてとらえられるようになりまます。これが足し算や引き算の基盤となります。瞬時に応えられたことをたくさんほめてください。

③数字は単なる記号ではなく、意味があります。低学年のうちから数や式のほかに、図(○図、線分図、数直線)や言葉であらわす(説明する)ことが効果的です。考える力をつけながら確かな計算力をつけるため、1つの計算を式や筆算だけでなく、図や言葉での説明を合わせて表現させるのです。理解の段階では、式、計算、図、説明を組み合わせて書かせることを繰り返すことで、たくさん練習させるよりも効果的な指導ができます。その際、○や棒を使った図を書かせる場合は、10のかたまりで表すようにします。十進法の計算の基盤です。

子どもがじっくりと計算に取り組み間をとらえて、よいやり方や説明の仕方などができた時に、確実にその子をほめて価値をつけることで、自信がつき、指で数えることから卒業していきます。すぐの効果も期待しすぎないで、ていねいに積み重ねていきましょう。

A2

体育の授業を行う提案ができ、多くの学年で進められていることはとても素晴らしいです。よい活動のスタートができましたね。一方、うまくいかない場合は、多面的に分析した上で、アプローチを変えていくことが大切です。

から、計画を進めていくとよいでしょう。意外とベースボール型やネット型のスポーツは、ルールが分かりにくくてやりたくないと思う子どもがいます。そのスポーツのイメージをもたせるため、ネット環境があればビデオを見せることも有効です。

①「急に体育と言われても」という場合、指導計画をこちらから一方的に決めてしまつてではなく、子どもにいくつか運動の選択肢を出して、その中で順番を決めて始めてみることも効果的です。その選択肢の中に、子どもが希望する種目を入れるのもよいです。学年によって差をつけることで、子どもにプライドをもたせることも効果的です。選択をさせるということは、主体的に授業に取り組むきっかけとなります。ただし、すべてを子どもに任せるとうまくいきません。選択肢を教師が出すことが大切です。

③みんなで運動をやることを子どもが嫌う場合は、個人の競技から入ることもよいです。陸上競技(幅跳び、50メートル走、400メートル走、ハードル走など)の記録をとることで、記録を伸ばして楽しさを感じていくことも大切です。年間計画の中に、チームばかりでなく、個人種目も取り入れることで、体育の授業が広がっていきます。

②実際にやったことがないスポーツに対して、子どもが「やりたくない」と感じる場合は、これまで経験した運動やドッジボールなど、ルールが単純なものから入るとよいです。慣れてきたら、ドッジボールでは柔らかいボールを2個にして、ルールや動きを変化させていきます。みんなで体を動かす楽しさを少し味わって

大事なことは、子どもの気持ちや行動の分析をしっかりとし、受け止めることからじっくりとスタートすることです。体育の授業では、ビデオでのイメージ作りもよいです。よい動きをした授業は、ビデオで紹介するとよいです。



# 任期終盤

## の心構え

### CASE 1 青少年の教育

なかはしてつや  
高橋哲弥さんの事例  
(ケニア・青少年活動・2017年度2次隊)



高橋さん  
基礎情報

#### PROFILE

1992年生まれ、北海道出身。大学卒業後、阿寒国立公園のホテルに約1年間勤務。2017年10月、青年海外協力隊員としてケニアに赴任。19年10月に帰国。

#### 活動概要

- カカメカ更生学校(カカメカ郡)に配属され、主に以下の活動に従事。
- 体育・美術・英語などの授業の実施
- 放課後のスポーツ指導(サッカー、バレーボール)
- 社会性を身に付けるための授業の実施

高橋さんの配属先であるカカメカ更生学校は、軽犯罪を犯した子どもや路上生活から保護された子どもなどを受け入れ、衣食住を提供しつつ、社会復帰に向けた教科教育や職業訓練などを行う全寮制の男子校。高橋さんに求められていた役割は、教科教育部門への支援だ。

着任当時、配属先には10代の少年約60人が在籍。学力別に3クラスに分かれ、それぞれ小学3、5、7年生の勉強をすることとなっていた。教科教育部門の現地教員は3人。大学生のインターンを常時数人受け入れており、彼らも教科の授業の補佐に当たっていた。

## 協力隊員が抜けた穴を埋める 外部協力者との関係強化に注力

軽犯罪を犯した子どもなどを対象に、社会復帰に向けた教育を行う学校に配属された高橋さん。同僚教員の仕事量の増加が見込めないなか、任期終盤に注力したのは、自身が抜けた穴を埋める外部協力者との関係強化だった。

授業を行うべきだ」と進言。しかし、一向に変化は見られなかった。

任期の半ば近くになってわかってきたのは、同僚教員たちは、歴代隊員が繰り返し主張してきたように「時間割どおりに授業を行うこと」が生徒のためには理解しているものの、「自分が割く労力はここまで」と決めているようであることだ。

そうして高橋さんは、活動の方針を変更。同僚教員たちに働き方を変えてもらうのではなく、授業やクラブ活動の充実化に協力してくれる人を配属先外に見つけることにした。手始めに試みたのは、子どもたちへの啓発活動などに取り組む任地の青少年グループのリーダーに、「ライフスキル」の授業を行ってもらうこと。彼自身の生い立ちや携わっている仕事、人生観などを話してもらった。

#### 【任期の終盤】

高橋さんはその後、同僚教員たちの行動変容を促すための働きかけに再度挑戦してみた。活用したのは、高橋さんが任期の半ばごろから生徒に書かせるようになった「学級日誌」だ。時間割にある授業のうち、どれが行われ、どれが行われなかったが明白になる記録でもあるこ

高橋さんが任期を通して主に担当した授業

#### 【任期の序盤】中盤】

とから、それを校長や同僚教員に見せるようにした。しかし、やはり同僚教員たちの行動変容にはつながらなかった。

そうして任期の残りが半年となった時期、高橋さんは同僚教員たちへの働きかけは続けつつ、授業やクラブ活動の充実化に協力してくれそうな配属先外の人との関係強化に注力していくとの方針を立てた。後任の協力隊員は派遣されない見込みだったことから、なおさら「外部との縁結び」の意義は大きいと考えられた。

幸運だったのは、配属先が「オープン」な環境だったことだ。一般の住民が利用する診療所が構内にあったため、門はいつも開けられており、外部の人が誰でも自由に立ち入ることができた。かつ、校庭は広いグラウンドだったため、外部の人がスポーツの練習に利用。そのため、外部の人とのつながりをつくるのは難しいことではなかった。高橋さんが任期終盤に関係強化を行ったのは、次のような団体や人たちだ。

- サッカーの社会人チームや大学生チーム
- 配属先の校庭を日々の練習場所としており、以前からそこに参加させてもらっている生徒もいた。高橋さんは両チームのメンバーに、自分の帰国後も生徒たちを練習に参加させてほしいと依頼しておいた。
- 小学校のバレーボールクラブの顧問

は、体育、美術、英語。3教科を合わせると毎日2、3コマずつ担当授業があった。そのほか、月・水・金曜日の放課後には、クラブ活動としてサッカーやバレーボールの指導も行った。

配属先の時間割には、教科の授業のほかに、社会に出たときに必要となる「自律心」などを養う「ライフスキル」という名称の授業が、週に1コマ組み込まれていた。教科教育部門の教員が行うはずのものだったが、高橋さんの着任時、それらの授業は行われておらず、そのコマは実質、「休み時間」となってしまうていた。「人手が足りない」というのが同僚教員たちの言い分だったが、彼らは自分が担当する教科授業も行わないことがあった。高橋さんが彼らに代わって授業を行ってしまうことは可能だったが、それをしてしまつては、帰国後にまた元の状態に戻ってしまうのは目に見えている。高橋さんが担当を任された体育などの授業やクラブ活動も、本来なら同僚教員たちが主体となって行うべきだと葛藤を、高橋さんは持ち続けていた。そうして、当初は彼らに「時間割どおりに

地域のスポーツ大会が高橋さんとの出会いの場。配属先の校庭をバレーボールクラブの練習に使うことができる旨を伝えると、毎週土曜日の練習場所にしてくれるようになった。顧問に依頼したところ、その練習に配属先の生徒たちを参加させてもらえるようになった。

前述の青少年グループのリーダーには、「ライフスキル」の授業を継続的に実施してくれるよう依頼しておいた。

「高橋さんが帰国した後の配属先」については、カウンターパートにあたる主任の同僚教員(以下、CP)とも意見交換をした。体育など、高橋さんが担当してきた授業に穴が開いてしまふという問題は、CPも理解していたが、彼が選んだ対策は、インターンの大学生たちに授業の主担当を任せるというもの。学生ごとに専門性が異なるため、授業の質が確保できる保障はなかったが、まずは「授業が行われること」が大事だと高橋さんは考えた。インターンの中には、3カ月間の研修期間が終わった後も、大学の授業がない時期にボランティアとして配属先の授業を手伝いに来てくれる人材もいたことから、高橋さんはCPの考えに賛意を示して帰国の途に着いたのだった。

### Lesson 1

～高橋さんの事例から～

#### 活動の引き継ぎ手を絞る

協力隊員が行ってきた活動を、配属先の同僚たちが引き継いで実施して貰えるとは限らない。任期終盤は、配属先にも了承してもらえるような現実的な引き継ぎ手を見定め、その人とかかわりに重点を置くという姿勢が重要だろう。

- 1 配属先への支援を引き受けてくれた小学校のバレーボールクラブの顧問(左端)が、配属先の校庭で配属先の生徒たちにバレーボールを教える様子
- 2 「ライフスキル」の授業。この日は現地のNGOの職員に体験談を話してもらった
- 3 高橋さんの美術授業で生徒たちが描いた絵
- 4 高橋さんの美術授業で写生を行う生徒たち



任期終盤は、自分が帰国した後の任地の発展につながるような活動に絞って取り組むべき——。そうした理想論を理解しつつ、「意義はさておき、最後に何かインパクトのある活動に挑戦してみたい」というジレンマを抱える協力隊員も少なくないだろう。そこで、任期終盤に考慮すべきことを、実践事例を通してピックアップしてみた。



# CASE 2

## 農家支援

やまもと たく  
山本拓功さんの事例  
(モザンビーク・コミュニティ開発・  
2017年度2次隊)



山本さん  
基礎情報

### PROFILE

1989年生まれ、奈良県出身。大学の経営学部でスポーツビジネスにおける経営戦略・顧客満足度について学んだ後、印刷関連メーカーに勤務。2017年10月、青年海外協力隊員としてモザンビークに赴任。19年10月に帰国。

### 活動概要

- イニャンバナ州農業・食糧安全保障局の地方出先機関であるイニャンバナ郡経済活動事務所配属され、農家を対象に主に以下の活動に従事。
- 養鶏の導入支援
  - 稲作(ネリカ)の導入支援
  - 保育所の立ち上げ

山本さんの配属先は農業支援や地域開発を行う機関。求められていた役目は、新規作物の導入などにより小規模農家の収入向上を支援することだった。

### 【任期の序盤〜中盤】

山本さんは当初から、「市場調査を踏まえた農業」の導入支援により、農家の確実な収入向上につながる活動に取り組みたいとの青写真を抱いていた。それを実現するためには、新たな取り組みと一緒にチャレンジしてくれる農家を探さなければならぬ。「農家から信頼を得ること」を最初の目標に据えた山本さんは、

農家が直面している問題をリサーチ。見つかった問題の解決方法につき、農業の専門性を持つ協力隊員に教えを乞うた。そうして任期の序盤に取り組んだのは、農家が野菜栽培について抱えていた問題を解決することだ。例えば、農家はトマトの「根腐病(※1)」に悩まされていた。「土地に呪いが付いた」と捉えていた彼らに、山本さんは発生のメカニズムを説明。その後、土壌の水はけを良くすることで、実際に発生を減らすことにも成功した。

そうして信頼を寄せてくれるようになった農家のなかに、「養鶏にチャレンジしたいので、力を貸してほしい」と依頼してくれる人が現れたのは、着任して10カ月ほど経ったころだ。市

# 「やり散らかし」を避け、 その後につながる活動で締め括る

農家の収入向上支援に取り組んだ山本さん。作物によって栽培に適した時期が限定されるなか、任期の残りが半年となった時点で、自身の帰国後の任地にとって利のある活動を精査して注力することにした。

市場調査をしたところ、食肉用の成鶏は通常、一匹430円程度で売れるのに対して、雛は一匹70円程度で買え、粗利率を大きくすることが可能な商材であることがわかった。しかも、雛から出荷できる大きさの成鶏まで1カ月ほどで育つ。「市場調査を踏まえた農業」のモデルケースをつくれるかもしれないと考えた山本さんは、依頼してくれた農家を相手に、同僚の農業普及員と共に養鶏のサポートに着手した。市場調査では、クリスマスや祭りがある月に成鶏の値段が急騰することもわかっていただけから、対象農家が技術をひととおりマスターすると、時期による出荷量の調節についても考えてもらった。

培と同僚の農業普及員と共に行うことにした。直径30センチほどのバケツを複数用意し、それぞれでネリカを含む異なる品種のコメを育て、違いを確認するという取り組みだ。結果、同僚の知識の充実化を図り、彼の手でネリカの栽培普及が継続される可能性をつくるという山本さんが描いた着地点を実現することができた。

ネリカの栽培導入支援については、「きれいに活動を締め括ること」を重視した山本さんだったが、「最後にもうひと花咲かせたい」という思いも強かった。そうして山本さんは、ネリカのバケツ栽培と並行して、任期終盤に1つだけ、それまでとは毛色の違う活動にチャレンジする。任地に「保育所」を立ち上げる活動だ。

山本さんは以前、自宅の大家に「友人が外で働いている間、その子どもを預かっている」という話を聞いていた。任地では母子家庭を含む核家族が多く、公立の幼稚園はあるものの、保育時間は12時までであるため、働く女性たちは午後には子どもの面倒を見てくれる人を確保しなければならぬとのことだった。

場所は、大家が自宅の離れを提供。保育士に就いたのは、大家が一員となっている女性グループのメンバー3人と、保育に関心があった任地の青年1人だ。預かる時間は、幼稚園に上がる前の年齢の子は朝から夕方まで、幼稚園に通っている子は降園後から夕方までとした。

山本さん自身が保育所開設の告知をしたことは一度もなかったが、口コミでその情報は広がり、帰国時までに登録児童は約100人にまで増加。山本さんの帰国後も、「引き続き運営している」との連絡が大家から入っているという。

任期が後半に入ってもまない2018年11月、山本さんは同僚の農業普及員と共に新たな活動を開始。ネリカの栽培導入支援だ。栽培が容易なのは雨期。現地では11月から5月までがそれに当たり、11月に土づくりを始め、5月に収穫するというのが、理想のスケジュールだった。山本さんは着任の約半年後にJICA専門家に栽培方法を学んでおり、かつネリカの栽培に挑戦したいという農家グループが見つかったことから、18年11月からの雨期を利用して栽培の支援をすることにしたのだ。

その期の栽培は成功。すると、山本さんの任期中にもう1サイクル栽培を試しておきたいという要望が対象農家から出た。任期の残り半年は乾期。ネリカの栽培は難しく、うまく収穫できない可能性が高い。尻すぼみの活動に手を出すよりは、自分の帰国後の任地に確実に利がある活動に力を入れるべきだろう。そう考えた山本さんは、対象農家のリクエストを断り、代わりに「バケツ栽培」による試験的な栽

培を同僚の農業普及員と共に行うことにした。直径30センチほどのバケツを複数用意し、それぞれでネリカを含む異なる品種のコメを育て、違いを確認するという取り組みだ。結果、同僚の知識の充実化を図り、彼の手でネリカの栽培普及が継続される可能性をつくるという山本さんが描いた着地点を実現することができた。

ネリカの栽培導入支援については、「きれいに活動を締め括ること」を重視した山本さんだったが、「最後にもうひと花咲かせたい」という思いも強かった。そうして山本さんは、ネリカのバケツ栽培と並行して、任期終盤に1つだけ、それまでとは毛色の違う活動にチャレンジする。任地に「保育所」を立ち上げる活動だ。

山本さんは以前、自宅の大家に「友人が外で働いている間、その子どもを預かっている」という話を聞いていた。任地では母子家庭を含む核家族が多く、公立の幼稚園はあるものの、保育時間は12時までであるため、働く女性たちは午後には子どもの面倒を見てくれる人を確保しなければならぬとのことだった。

場所は、大家が自宅の離れを提供。保育士に就いたのは、大家が一員となっている女性グループのメンバー3人と、保育に関心があった任地の青年1人だ。預かる時間は、幼稚園に上がる前の年齢の子は朝から夕方まで、幼稚園に通っている子は降園後から夕方までとした。

山本さん自身が保育所開設の告知をしたことは一度もなかったが、口コミでその情報は広がり、帰国時までに登録児童は約100人にまで増加。山本さんの帰国後も、「引き続き運営している」との連絡が大家から入っているという。

山本さんは、この保育所で「情操教育」の導入も試みた。任地の幼稚園ではそれが欠けているのを知っていたからだ。保育士を務めてくれる人たちに情操教育の重要性を伝え、日本から

持参していた折り紙や積み木などのおもちゃを寄贈。「このおもちゃをこう使えば、子どももこのように能力を育てることができる」といったひととおりの説明もした。しかし不十分だったようで、「投げて遊び、壊して終わり」という状態になってしまった。「どう活用されるか」に配慮せずに行う「物」や「金」の援助には意味がない。そんな自戒は着任当初からあったが、「最後に一花を」という焦りからそれを犯してしまったというのが、山本さんの反省である。

\*2 ネリカ…アジアイネの高収量性と、アフリカイネの耐乾燥性・耐病虫性などを併せ持つコメの品種。

\*1 根腐病…根や地下茎が菌類の寄生により腐り、立ち枯れてしまう病気。



- 1 初めて挑戦したネリカ栽培で収穫まで漕ぎ着けた農家グループ
- 2 農家と開墾をする山本さん(右)
- 3 育て始めの雛を手にする農家(右)と山本さん
- 4 出荷サイズまで育った成鶏を手にする農家
- 5 任期終盤に開設した保育所

## Lesson 2

～山本さんの事例から～

### 闇雲に手を広げない

任期の終盤になって新たな活動への着手を検討する場合、帰国までにその活動をどこまで進めることができるか、「着地点」を計算し、実行の是非を冷静に判断することが重要だ。



# CASE 3

## スポーツ指導

こまなひろし  
小来田広志さんの事例  
(パラグアイ・レスリング・  
2017年度2次隊)



小来田さん  
基礎情報

### PROFILE

1984年生まれ、大阪府出身。大学の国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科卒(スペイン語コース専攻)。高校と大学でレスリング部に所属し、大学時代は西日本学生選手権で準優勝。大学の学生寮の生活指導員等を経て、2017年9月に青年海外協力隊員としてパラグアイに赴任。19年9月に帰国。

### 活動概要

パラグアイレスリング連盟(アスンシオン市)に配属され、レスリングに関する主に以下の活動に従事。

- 選手への指導
- 国際大会へのコーチとしての同行

パラグアイのレスリング連盟に配属された小来田さん。求められていた役目は、同国では極めてマイナーであるレスリングの普及やヘルプアップを支援することだ。

配属先がレスリング教室の練習場所としていたのは、パラグアイスポーツ庁の施設。2面分のマットが敷かれたレスリング場があった。小来田さんの着任当時、教室の運営はイランの代表選手になった経験を持つ臨時コーチが担当。配属先にはコーチとして登録されているパラグアイ人もいたが、選手としての経験がほとんどないという、無給のポストであるため、本職の都合で練習への参加はほとんど期待できない状況だった。

# 10年後、20年後を見据え、任期終盤は「心」の対話に注力

パラグアイのレスリング連盟に配属され、選手への指導に携わった小来田さん。任期終盤は、選手たちのなかに同国のレスリング界を背負って立つ人材を生むべく、「技」の指導だけでなく「心」の対話にも力を入れた。



に、連盟から遠征費用の補助がない」と不平を漏らした。無断で遅刻したり休んだりするなど、練習に取り組む姿勢に問題がある選手だったこともあり、小来田さんはAさんと話し合う機会を持ち、こう伝えた。「ごみの練習への取り組み方は、連盟からの補助に値すると思うか?。すると以後、彼の練習に取り組む姿勢が変化。遅刻したり休んだりするときは、事前に連絡してくるようになった。

周辺諸国とのレベルの違いに気が遠くなる思いを持った小来田さんだったが、Aさんの変化により、自分が果たすべき役割を見出す。選手たちの「レスリングに取り組む姿勢」を育てることだ。「技術」に先立つそうした「土台」こそ、黎明期にあるパラグアイのレスリング界には重要だと考えたのだった。

そうして小来田さんは、教室に「練習後のミーティング」を導入。「練習には時間どおりに来る」「練習前にマットの掃除をする」「練習後に後片付けをする」「道具を大切に扱う」といった、レスリングに取り組むうえで大切な「姿勢」について話し合った。

### 【任期の終盤】

小来田さんは任期の半ば、教室の練習日を月曜日から金曜日までの週5日に増やした。「毎日の練習を定着させた」「それにより選手の戦績が上がった」といった、わかりやすい「活動の成果」を残したいという欲が出てきたからだ。しかし、新たに練習日とした火曜日と木曜日に参加する選手の人数は思うように伸びない。それどころか、負担の増加が選手たちのモチベーションを低下させ、月・水・金曜日の参加者すら減ってしまった。

小来田さんは任期の残りが半年程となった時期、ふたたび練習日を週3日に戻したうえで、

小来田さんの着任の2カ月後にイラン人コーチが去ると、小来田さんによる教室運営が本格的にスタート。イラン人コーチと同様に、月・水・金曜日の週3回、夕方6時から2時間の教室を開き、指導にあたっていた。参加者は毎回10人程度。大半は二十歳以上の社会人男性だった。イラン人コーチに教わっていた選手もいたが、教室の参加者はいずれも初心者レベル。着任の約半年後にポリビアで開かれた南米大会に、教室でもっとも強い選手(以下、Aさん)を出場させたが、歯が立たなかった。

Aさんは試合後、「国際大会に行くというの

で、自分の活動の「成果」をどこに求めるべきかを再検討。そうして、教え子たちがレスリングにかかわり続け、10年、20年と経つころにはパラグアイのレスリング界のキーパーソンになってもうこうこそ、自分が求めるべき「成果」だと考えた。

そうした「成果」をもたらすために任期終盤に力を入れたのは、レスリングに対する自分の考えを練習後のミーティングで積極的に伝えることである。繰り返し話をしたテーマのひとつは「スポーツの意義」。スポーツを通して何を得ることができるのか、小来田さん自身のレスリング経験を題材に、こんな話をした。

——困難があっても努力し続けた結果、目標としていた成績を収めることが叶ったことも、叶わなかったこともある。努力しても勝てないことがあるのは、勝負の世界である以上、スポーツでは当然のこと。しかし、目標が叶わなかったからと言って、それまでの努力が無駄になるわけではない。そこで得た「困難があっても努力し続ける力」は、スポーツ以外の場でも必要とされるものだからだ。レスリングに取り組むことによって養われるそうした力によって、自分自身の生活、さらにはパラグアイの人々の生活をより良いものにしていくつもりだ。こそが、私がここでレスリングを指導する目的にほかならない……。

小来田さんのこうした話に、レスリングに対する真摯な姿勢をあらためて実感した選手たちは、任期の終わりが近づくにつれ、行動に変化が見られるようになっていく。練習後のミーティングでは、選手たちが互いに「ちゃんと座れ」「ちゃんと話を聞け」などと注意し合うようになった。練習場の入り口で脱ぐ靴を、彼らが初めて自発的に揃えるようになったのも、任期の残りが3カ月ほどとなったころだ。それまで、彼らが脱ぎ散らかした靴を小来田さんが揃



- 1 選手に技の指導をする小来田さん
- 2 選手が初めて自発的に揃えた靴を見て、小来田さんが思わず撮影した写真
- 3 練習前にマットの掃除をする選手たち
- 4 小来田さん(中央)が最後に参加した練習の後に、当時の教室の選手たちと
- 5 練習後の定例ミーティング

## Lesson 3

～小来田さんの事例から～

### その後の継続につながる指導を

スポーツ指導に取り組む場合、教え子たちにその後も長く競技を続けてもらうためには、任期終盤に「スポーツに取り組む意義」をあらためて考えさせる機会を増やすことも有益だろう。

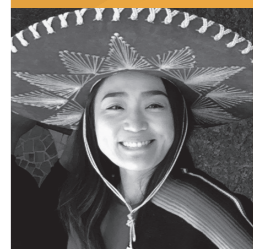
えていたが、彼らに「靴を揃えて脱ぐ」と伝えたことは一度もなかった。

任期が終わるころに教室に通っていた選手は約10人。なかには、いずれパラグアイのレスリング界を背負って立つていくくれるだろうと期待できる選手もいた。一人は、技術レベルはさほど高くはないものの、誰よりも早く練習に来て掃除を始めるなど、後進を率いているような人間性を持つ選手だ。もう一人は、技術レベルがもっとも高かった前述のAさん。小来田さんの帰国後も、2人が中心となって練習を続けていることが、Facebookを通じて伝わってきているという。



# CASE 4

職業訓練  
まつお 松尾まどかさんの事例  
(ボリビア・美容師・2017年度2次隊)



松尾さん  
基礎情報

## PROFILE

1982年生まれ、大阪府出身。美容師を務めるかたわら、美容技術を活用した社会貢献活動に取り組むNPO法人を運営。その後、大学院進学を経て2017年9月、青年海外協力隊員としてボリビアに赴任。19年9月に帰国。

## 活動概要

- 財団法人INFOCAL職業訓練学校のサンタクルス校(サンタクルス県サンタクルス市)に配属され、美容科に関する主に以下の活動に従事。
- 授業の支援
  - 美容室の経営に必要な技術(「5S」など)を教える講座の開催(他隊員との協働)
  - 特別支援学校などでの美容教室の開催

松尾さんが配属されたのは、財団法人がボリビアの全9県で運営する職業訓練校の一つ。美容科の授業の質向上を支援することが、求められていた役割だった。

同科には、2年制の長期コースと半年ほどの短期コースが存在。前者は高校卒業者に入学資格があり、主にこれから美容師になりたいという人が受講。後者は、主に美容師として働いている人がスキルアップのために通っていた。授業は1日に最大で計8コマあり、同科に所属する3〜5人の教員で分担。運営母体の財団法人にはオリジナルの教科書があり、授業はその内容に沿って進められていた。

任期の前半から松尾さんの活動の柱となつたのは以下の3つだ。

### ■ 授業の支援

同僚教員たちの授業に入らせてもらい、彼女たちが知らない技術のデモンストレーションをしてみせるなどの支援をした。南米の女性には少ないショートヘアのカット方法や、ボリビアでは見られない日本のネイルデザインなどである。また、客にとって心地良いシャンプーやマッサージを体感してもらうため、松尾さんがそれらを同僚教員や生徒たちに施してみせることもあった。

## 自身の帰国後の進路に向け 派遣中にできる準備を進める

職業訓練校に配属され、美容科の授業の支援に取り組んだ松尾さん。協力隊活動や、赴任後のネットワークで得た情報を通じて自身の「帰国後の進路」が見えてきた任期終盤、それに向けた準備を活動と並行して進めた。

### ■ 特別講座の開催

配属先からのリクエストに応じて、ときに授業外の「特別講座」を開き、講師を務めた。その一つは、日本のネイルデザインを紹介する7日間の集中講座。もう一つは、美容室を構える際に顧客を獲得するうえで重要となる技術を教える講座だ。ボリビアの職業訓練校で活動する協力隊員たちにも協力を仰ぎ、「5S」「衛生管理」「接客」「PDC Aサイクル」といったテーマの講習を手分けして行った。松尾さんは「5S」の講習を担当した。

### ■ 配属先外での活動

松尾さんは派遣前に日本で、就職活動への自信を持ってもらうことを目的としたシングルマザー対象の美容教室など、人の心に積極性を与える「美容」の力を生かした社会貢献活動にも取り組んでいた。ボリビアでも、配属先での活動の合間を縫って同種の活動を実践。特別支援学校で美容教室を開く活動などだ。そうした配属先外での活動に同僚教員たちも関心を持つようになり、配属先の生徒を孤児院や高齢者施設などに連れて行き、ヘアカットやメイクなどをさせてもらう「出張美容実習」が授業の一環として行われるようになった。

### 【任期の終盤】

松尾さんが任期終盤、活動の締め括りとして取り組んだのは「動画教材」の作成だ。同僚教員たちは年度ごとに入れ替わるのが常となっていた。そのため、松尾さんがそれまで授業に入るなどして彼女たちに伝えてきたさまざまな技術は、配属先に「共有財産」として残る可能性が低かった。そこで、現役の生徒や卒業生たちにもいつでも見て参考にもらえるような教材の作成を着想。前述の「ネイルデザイン」の集中講座で紹介したものを含む十数点のデ

ザインにつき、施術の様子を動画撮影し、YouTubeやFacebookの自分のページにアップロードした。

松尾さんは任期終盤、活動と並行して自身の「帰国後の進路」に関する準備を進めた。前述のとおり、松尾さんは派遣前と同様、ボリビアでも「美容」の力を生かした社会貢献活動」に取り組んだが、その経験を通じて自身の帰国後の進路に関するビジョンも見えてきた。「美容」以外に新たに「ソーシャルワーク」に関する専門性を身に付け、「美容」の力を生かした社会貢献活動」にさらに本格的に取り組んでいくというものだ。

活動を行った配属先外の施設で松尾さんが特に強い関心を持ったのは「難民のシェルター」。30を超える国からの難民を常時10〜20人程度受け入れている施設だ。松尾さんにとって「難民」との初めての接点であり、先の人生が見通せない彼らのような境遇の人たちの存在に、衝撃を受けたのだ。そうして、難民への支援にいずれ仕事として取り組んでみたいと考えるようになり、JICA事務所のスタッフなど、赴任後に会ったさまざまな人から情報を収集。難民支援に携わるためにはソーシャルワークの専門性を身に付けておいたほうが良いこと、難民を対象としたソーシャルワークについて学ぶなら、海外の大学という選択肢もあることなどわかってきた。

メキシコの大学・大学院で学ぼうと狙いを定めたのは、動画教材づくりを始めた帰国の半年前だ。同国政府が留学生に奨学金を出すプログラムがあることを、実際に利用した協力隊経験者から聞き、それに応募することにしたのだ。リストアップされた大学・大学院のなかから希望の研修先を2つ選んで応募し、同国政府が各研修生の専門分野や語学力をもとに研修先を決定するというプログラムである。



- 1 松尾さんが授業の一環として行った、ショートヘアのカット方法のデモンストレーション
- 2 授業で日本のネイルデザインを紹介する松尾さん
- 3 日系移住地の女性たちを対象に行った「認知症予防のためのセルフメイク教室」
- 4 客にとって心地良いシャンプーを生徒に体験してもらう松尾さん
- 5 高齢者施設に赴いて「美容実習」を行う生徒たち

松尾さんは南米に在るといふ地の利を生かし、派遣中に任国外旅行の制度を利用してメキシコを訪問。プログラムの対象校のうち、ソーシャルワークが学べる大学2校でカリキュラムの詳細を尋ねたり、大学の雰囲気や町の雰囲気確かめたりした。プログラムへの申し込みの期限は帰国の3カ月後だったが、3通必要だった推薦状の一通は、配属先の美容科の科長にお願いし、派遣中に書いてもらっていただいた。

そうして、任期中だからこそできる準備をしたうえで帰国すると、即座に研修計画書や志望動機書をまとめ、提出。書類選考を無事通過することができたのだ。

## Lesson 4

～松尾さんの事例から～

### 終盤は「帰国後の人生」も視野に

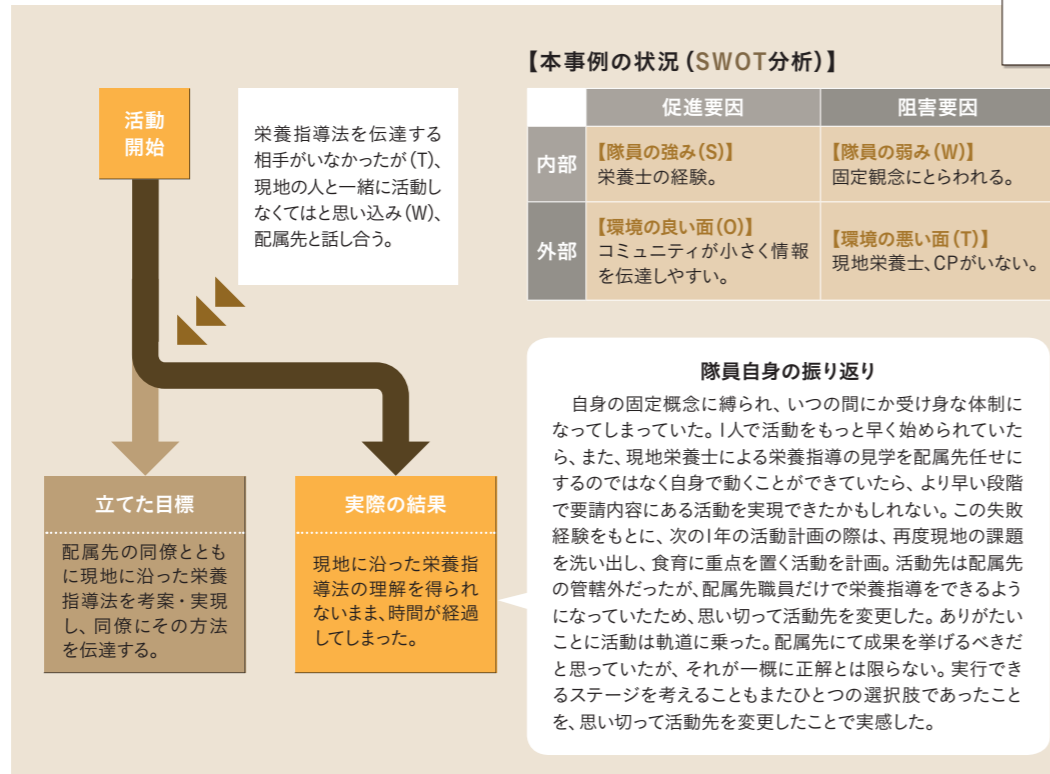
協力隊経験を通じて自分自身の「帰国後の人生」が見えてきた場合、任期終盤にそれに向けた準備を進めておけば、帰国後に新たな人生に向けた一歩をスムーズに踏み出せる。



# “失敗”から 学ぶ #180



## 事例整理



私は新規派遣の栄養士隊員として、町で唯一の医療機関である保健センターに派遣された。配属先責任者をカウンセラーパート(CP)として紹介してもらったものの、責任者は多忙で、業務と一緒に行うことはなかった。小さな町なので患者も少なく、往診や集団指導も行っていただけで、持て余す時間が多かった。

配属先には5年以上前から現地栄養士がいないため、私を栄養士の補充と捉えていたようで、責任者は具体的な栄養業務を把握しておらず業務内容は丸投げだった。要請内容と現状は異なる場合があるという話は聞いていたのである程度の覚悟はしていたが、実際その状況になると孤独感と焦りが増えていった。

私は業務について配属先と話し合いを行い、ヘルパーでの栄養指導の現状把握や情報収集に努めるべきだと考え、他施設で現地栄養士の栄養指導を見学させてほしいと交渉。しかし、栄養に関する活動を自ら発案し、進めることはしなかった。

半年後ようやく見学が実現でき、現地に合わせた栄養指導を配属先でも実行できるようにしたが、配属先が私の活動に特に興味を持っている様子を感じ

ことはできなかった。また、CPは多忙で現地栄養士も不在のため、栄養指導の知識を伝える相手がいない。「現地の人と一緒にやらなくては意味がない」と思っていたので、配属先と活動について話し合いを重ねたが、理解を得られず時間だけが経過した。

そこでようやく、自分の固定観念「現地の人と一緒に……」が活動の障害になっていること、また配属先の人の関心を得るには私自身が行動で示すことが重要だと気づいた。状況に合わせた計画を立てるため、こだわりの気持ちを一旦置き、1人でも積極的にコミュニケーションで栄養指導を実施するようにしていった。

そうすると他地域からも声をかけてもらえるようになり、多くの人々に栄養の知識を伝える機会へつながった。また私の活動を見ていた職員が「自分でも指導したいからデータが欲しい」と栄養指導に興味を持ってくれるようになった。その職員に私の指導を見てもらい、学んでもらう。そして栄養指導用の資料などを作成し、誰でも簡単に指導できるようにした。1年が経過したころには、住民の栄養への理解も深まっていった。

「現地の人と一緒にやらなくては意味がない」と思い込みすぎてしまった

文＝大塚歩美さん(ヘルパー・栄養士・2017年度3次隊)

## 他隊員の分析

### 活動を通して協働できる人を探してみる

初期段階で隊員に対する配属先の要求の違いなどから、思い描いていた100パーセントの出発ができない隊員もいます。そんなときは何か小さな活動から始めても良いのではないのでしょうか。それを同僚が見て今後の活動が好転したり、協働してくれる人を見つけ出すことにつながります。私の場合、CPが高役職者で実務的な協働ができなかった代わりに、視点を変え、彼の認知度を生かして地域のリーダーなどの組織に仲介してもらい、その活動を通して出会った役所の女性課職員や保健師と協働し、活動を広げることができました。

文＝協力隊経験者

- 中南米・栄養士・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

教育省教育事務所に配属され、小学校で支給される軽食メニューの改善と児童に食育教育、地域の女性に対しバランスの整った食事づくりの講話やその料理教室、さらに米国平和部隊(ピースコー)と共同し、保健支所で妊産婦に対する栄養教室などを実施した。

### 配属先との関係構築を優先しては?

現地の人たちと一緒に活動するのに十分な人間関係をもっと構築してもよかったのかもしれないと思いました。限られた時間の中で焦るのわかりますが、活動よりも周りとの関係をきちんとつくってから行動に移すと意外とスムーズに進むこともあります。私も同じように配属先に共に活動するCPと呼べる人がいなくて苦労しましたが、キーパーソンになってくれる人を複数見つけ、少しずつ関係構築をしていながら活動を進めていきました。そのおかげで配属先だけでなく、広いフィールドで活動できたと思います。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・栄養士・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

県病院の栄養改善部門に配属。栄養改善指導のための指導媒体やクッキングデモなどを行い、栄養失調の子もたちや地域住民の栄養改善に従事。



野菜を食べる習慣がないため、野菜を身近に感じてもらうように「野菜を使ったスイーツづくり教室」を開催する大塚さん(左から2人目)。現地の人には甘いものが好きな人が多いため、野菜への入り口として好きなものを組み合わせることでより興味を持ってもらうことができた。



### PROFILE

1991年生まれ、京都府出身。2014年神奈川県管理栄養士課程の大学卒業後、管理栄養士として京都府と神奈川県の総合病院にて栄養指導や臨床栄養分野の業務に従事。18年1月に青年海外協力隊員としてヘルパーに赴任。20年1月に帰国。

### 活動概要

- 地域唯一の保健センターにて、地域住民の栄養調査ならびに衛生・栄養改善や疾患予防として主に以下の活動に取り組む。
- 児童学童施設にて給食メニューの改善と食育活動
  - コミュニティや教育施設にて軽食メニュー改善と集団栄養教室の実施等の活動
  - NGO団体 Cedep と栄養に関するパンフレット作成(成果品登録) など



派遣人数は少ないもの  
いぶし銀の活躍をする  
職種の事例をピックアップ

#D201

## 化学・ 応用化学

派遣中 ▶ 2人

累計 ▶ 121人

分類 ▶ 鉱工業

活動例 ▶ 研究施設などでの化学分野の研究や分析操作についての支援

類似職種 ▶ バイオテクノロジー など

※人数は、2020年3月31日現在。



液体クロマトグラフ/質量分析装置で分析を行う松澤さんとスタッフ。配属先のラボスタッフは35~40人で、多くが20代、センター長は40歳だった。半数は英会話ができなかったが、2年目には皆と片言の英語で仲良くなることができた

### PROFILE

1949年生まれ、埼玉県出身。68年、旧通産省の研究所に技官として入所し、主にエネルギーと環境に関する業務に従事。東京理科大学理学部化学科(夜間部)を73年に卒業。90年に工学博士。2009年から財団法人日本品質保証機構で地球環境CDM審査業務に従事。13年からシニア海外ボランティア(化学・応用化学)としてパラグアイ(長期)、ミャンマー(短期)、ベトナム(長期)に赴任。19年10月にベトナムから帰国。現在、つくばエキスポセンターでボランティアインストラクターをしている。

### 活動概要

ベトナム科学技術アカデミー、研究・技術移転センターにて、「食の安全」の確保に対応できるようにするため、以下の活動を行う。  
●食品分析に関して分析技術の向上支援  
●ラボの運営管理能力の向上支援  
●若手スタッフの人材の育成  
●国内・国外の他機関との連携促進 など



まつざわ ただまさ  
松澤貞夫さん  
(シニア海外ボランティア/  
ベトナム・2017年度2次隊)

※派遣名称は派遣当時のものです。

**Q 活動の最大の困難は?**  
配属先では、数千円もする分析装置を購入した一方で、サンプルの前処理に利用する小型装置や検査用の消耗品など、実験で不可欠でかつ比較的価格な物品の購入が困難でした。また、

**Q メインの活動は?**  
配属先では「食の安全」の確保のため1台数千円もする分析機器を数台導入したが、スタッフの分析技術の経験不足のため生かされていない状況でした。このため、食品中の微量有害化学物質を分析できるようにするということが主な活動でした。

**Q どう対応しましたか?**  
サンプルの前処理に利用する装置に不具合が生じたときの修理や点検についても、予算の関係ですぐに業者に連絡することができませんでした。また、消耗品は消費期限切れの物が冷凍庫や実験台下に存在していることがわかり、使えるものを用いました。何かは無理を言って購入してもらいましたが、入手に3カ月もかかりました。装置のメンテナンスの必要性に関しては、幾度となくスタッフや管理職に説くとともに、最終的にはセンター長の許可を得て、自ら分析感度に影響する重要部品のメンテナンス作業をしてスタッフに手本を示しました。

**Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。**  
現地の人と一緒に働けることは非常に楽しいですが、相手に不快を与えたり言い合いをしたりすることを極力抑えながら問題点を指摘することは想像以上に難しいことです。世界の人のために誰にでもプライドがあり、それを傷つけられるのを非常に嫌います。皆さんもぜひ現地の人とより良い関係をつくる方法を探ってみてください。

\*1 微量有害化学物質…本来は食品などの成分ではなく、どこかの過程で外部から混入するが生成される化学物質。 \*2 標準物質…分析を行う際に用いる基準となる物質。 \*3 アフラトキシン…天然物質の中で最も発がん性が強いカビ毒。 \*4 アフラトキシン混合物…アフラトキシンには種類があり、数種類を混ぜた標準液(標準物質)。 \*5 LC/MS…液体クロマトグラフ/質量分析装置。微量分析を得意とする装置。 \*6 微量分析…含有量のきわめて少ない成分の分析。 \*7 サンプルの前処理…分析信頼性の向上などのために、分析を妨害する物質を除去したり、濃縮したりすること。

#B111

## 上水道

派遣中 ▶ 3人

累計 ▶ 39人

分類 ▶ 公共・公益事業

活動例 ▶ 市役所で安全な水へのアクセス向上を目指した技術支援 など

類似職種 ▶ 土木、水質検査

※人数は、2020年3月31日現在。



現地の人のために作成した漏水調査機材を用いて、実際に発生した漏水現場で調査方法などを教える南さん

### PROFILE

1984年生まれ、鹿児島県出身。鹿児島工業高等専門学校土木工学科(現:都市環境システム工学科)を卒業後、5年間民間企業で働く。2010年、鹿児島市役所へ入庁し、水道局にて上水道管路施設の維持管理業務に6年間従事。18年1月、青年海外協力隊に現職参加し、ネパールへ赴任。20年1月に帰国。現在は、鹿児島市役所に復職し、土木工事の発注業務などに従事している。

### 活動概要

郡の上水道施設の建設を行う事務所に配属され、新設後に施設の移管を受け、更新・維持管理業務を行う組織へ、以下の活動を行う。  
●NRW(無収水\*)の削減  
●漏水調査機材の製作及びその機材を用いた研修・施工品質向上の為の研修の実施など  
●GISソフトを用いた上水道施設配管図の作成



みなみともひろ  
南智大さん  
(ネパール・2017年度3次隊)

**Q 活動の最大の困難は?**  
活動先の役員は上水道配管図の作成を快諾した一方、従業員たちは否定的な反応でした。図面作成に伴う作業の説明時も「私たちはそんなこと習ったことがない、スキルもない。あなた

**Q メインの活動は?**  
郡の上水道施設の建設を行う事務所に配属され、新設後に施設の移管を受け、更新・維持管理業務を行う組織へ、以下の活動を行う。  
●NRW(無収水\*)の削減  
●漏水調査機材の製作及びその機材を用いた研修・施工品質向上の為の研修の実施など  
●GISソフトを用いた上水道施設配管図の作成

**Q どう乗り越えましたか?**  
自分の考えを伝え続け、極力彼らの仕事に同行してコミュニケーションをとるうちに、私の活動に対する彼らの態度が変わってきたように感じました。時の経過とともに言語も達したことで、言いたいことが伝わるようになったのかもかもしれません。提案から5カ月後(赴任11カ月後)には図面作成に向けて活動が動きだしました。

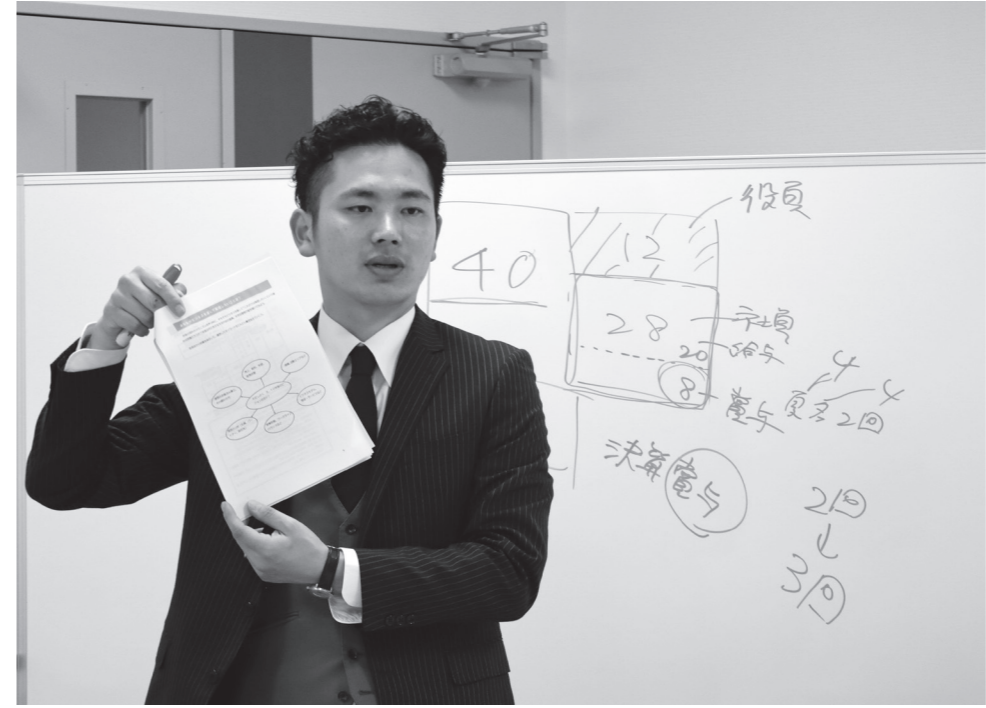
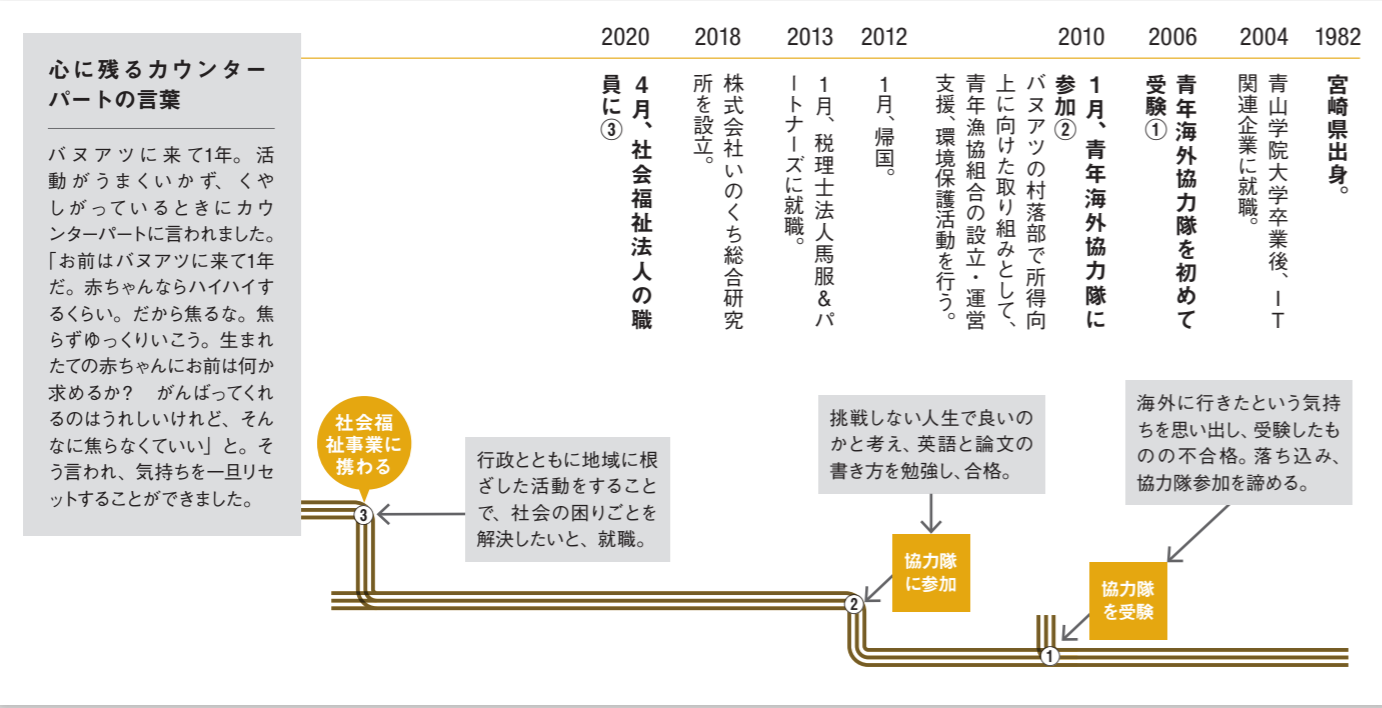
**Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。**  
上水道の隊員の活動例がなかったために、どのような活動を行えるのかと悩んだこともありましたが、皆さんにはこれまでの上水道に関する自分の経験を生かして活動してほしいと思います。また、隊員は予算を持たないため、活動の際に難しい側面もあるかと思いますが、予算を持たずともできる活動はあると思うので、工夫をしながら、限られた期間の中で自分らしい活動を行ってほしいと思います。

**Q どう対応しましたか?**  
サンプルの前処理に利用する装置に不具合が生じたときの修理や点検についても、予算の関係ですぐに業者に連絡することができませんでした。また、消耗品は消費期限切れの物が冷凍庫や実験台下に存在していることがわかり、使えるものを用いました。何かは無理を言って購入してもらいましたが、入手に3カ月もかかりました。装置のメンテナンスの必要性に関しては、幾度となくスタッフや管理職に説くとともに、最終的にはセンター長の許可を得て、自ら分析感度に影響する重要部品のメンテナンス作業をしてスタッフに手本を示しました。

**Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。**  
現地の人と一緒に働けることは非常に楽しいですが、相手に不快を与えたり言い合いをしたりすることを極力抑えながら問題点を指摘することは想像以上に難しいことです。世界の人のために誰にでもプライドがあり、それを傷つけられるのを非常に嫌います。皆さんもぜひ現地の人とより良い関係をつくる方法を探ってみてください。

\*無収水…配水管からの漏水や違法な使用による盗水などにより料金が徴収できない水。

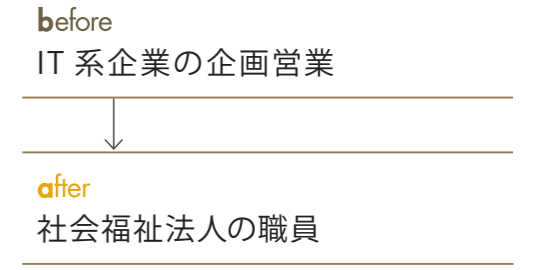




経営コンサルタント時代に、経営者向けのセミナーで講師を務める井口さん



before after 人生を変えた2年間



「婚約破棄が協力隊に行こうと思ったきっかけ」と話すのは協力隊経験者の井口さんだ。大学卒業後IT企業に勤務したのち、協力隊員としてバヌアツに赴任。現地にとっぴり潰かった2年を終え、帰国すると逆カルチャーショックを受けた。悩み抜いた結果、人の困りごとを解決する仕事に就きたいと、地元で税理士事務所就職したのち、現在は地元の社会福祉事業を行う民間団体で働いている。

「結婚」か「協力隊」か

高校2年のとき、海外で大成功した人の自伝的小説を読み、海外での生活に興味を持ったという井口さん。宮崎県にある井口家の教育方針は「学費は自分で賄う」だったため、高校時代も大学時代も働きながら学校に行き、大学卒業後は「社員寮があつて稼げる仕事に！」と、IT系の企画営業職に就いた。

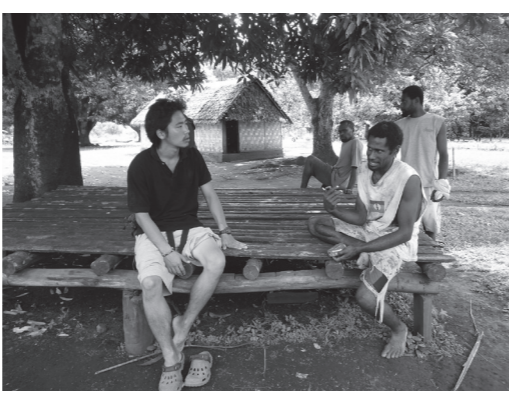
当時の彼女と結婚を考えていたとき、人生でやりたいことを振り返り、海外で生活したかったことを思い出した。結婚するとなるとすぐには難しいので、彼女に「何十年後かに海外で生活したい」と伝えた。すると大反対され、彼女が海外かを選ぶ事態となり、最終

失敗はない。成長があるだけ

井口雄介さん

バヌアツ・村落開発普及員・2009年度3次隊いのちゆうすけ

※現コミュニティ開発



バヌアツで漁業関係者の現状を知るための調査をする井口さん

アツでの生活で、故郷の温かさと家族の大切さを感じるようになっていた。

家族の困りごとを解決するように

帰国後は、海外経験を生かせる開発コンサルティング企業や商社での勤務を目指して東京で就職活動をしたが失敗。スキル不足と同時に、協力隊経験だけでは希望の業種に就くのは難しいと知り、目標を見失ってしまう。一旦自分を見つめ直す必要性を感じ、宮崎に帰郷。JICAの進路相談カウンセラーに相談して協力隊経験の棚卸しなどをし、やりた

い仕事は何かを考えた。また、スキル不足を補うため職業訓練所で学び、資格も取得。そんな井口さんの姿を見ていた職業訓練所のスタッフから地元の税理士事務所の仕事を紹介された。地域に根つき、経営者の困りごとを解決するという仕事内容に、協力隊活動と似たやりがいを感じ、挑戦したいと思った。求人に応募し、同事務所に就職。5年の勤

的に婚約破棄。一方で、海外生活への思いは増し、営業先のお客様から教えられた協力隊に応募したが、不合格。落ち込んでしまい、2度と受験しないと思ったそう。その後もそれまで通り働いていたが、「挑戦しない人生でいいのか」と再受験を決め、英語の勉強などをし直し、2度目の応募で合格した。

村落開発普及員として、バヌアツの地方にある水産局に配属された井口さんは、現地の漁業者の収入向上を目指して活動に取り組んだ。「10個提案して、1個うまくいけばいい方。失敗の方が多かった」と振り返るが、現地の人の役に立てることを提案・実行していった。特に、現地の社会問題であった青年の就業率の低さに着目した活動では、青年たちの漁業組合を設立することで、青年の仕事意欲を向上させ、収入向上を達成できた。青年たちと家族のように付き合い、悩みを聞き、話し合った結果だと感じている。収入を得た日に、親にお金を渡している青年の姿を見ることができたのは何よりも嬉しかった。

「寝言も現地語で細胞まで現地化していた気がする」という井口さんは、自分と同じ名前の「ユースケ」と名付けられた子どももいるほど現地の人に受け入れられた。そんなバヌ

務を経て、井口さんは経営コンサルティング会社を設立した。中小企業の経営者の相談を開き、企業の利益を最大化しながらも社員満足度を向上できるように仕事に取り組んだ。「暑苦しい、泥臭いなど感じる方法かもしれませんが、お客様を家族だと思えば、家族が困っていたらどうするかという気持ちで考え、経営者と2人3脚で歩んできました」

しかし、社員満足度向上のために給料を増やし、福利厚生を整えても、親の介護・育児などにより離職が絶えなかった。「人は給料という物理的欲求のためだけではなく、生き甲斐や働き甲斐などの精神的欲求を満たすために働く時代に変化している。そのことをヒシヒシと感じ始めました」

気づけば「ひとりひとりの生きがいとは何だろうか？」と井口さんの好奇心は「会社」から「個人」へとシフトし始めていた。そんなときに出合ったのが、現在勤務する社会福祉事業を行う民間団体の仕事だ。市役所などの仕事地域域の住民へ公平にサービスを提供するとするならば、同団体の仕事は地域住民のひとりひとりの課題に寄り添うこと。井口さんが暮らす地域で同団体職員募集があると知り、挑戦を決めた。働きはじめたばかりだが、「今の私にとって、協力隊活動の再来のようにさえ感じる」と井口さんは話す。

「協力隊もその後の人生も、挑戦してうまくいかないことが少なからずありました。しかし、協力隊での経験をとおして、大事なことは失敗でも成功でもなく、挑戦し成長し続けることだと学びました。その学びを現在の仕事で生かし、目の前にいる人が幸せになるお手伝いをしていきたいと思っています」



# よもぎま話

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、O・B・O・Gに語り合ってもらいます。



## 【座談会参加者】

### Cさん(女性)

【派遣前】  
高校の音楽科教員  
【協力隊】  
▶現職参加  
▶・音楽  
・中南米  
・2015年度派遣  
▶中等学校で音楽教育に従事  
【現在】  
高校の音楽科教員

### Bさん(男性)

【派遣前】  
中学校の音楽科教員  
【協力隊】  
▶現職参加  
▶・音楽  
・アジア  
・2015年度派遣  
▶学校のプラスバンドの指導などに従事  
【現在】  
中学校の音楽科教員

### Aさん(女性)

【派遣前】  
特別支援学校教員(音楽を含む教科全般を担当)  
【協力隊】  
▶退職参加  
▶・音楽  
・アジア  
・2013年度派遣  
▶音楽学校でピアノとバイオリンの指導に従事  
【現在】  
国際協力事業を行う民間団体の職員

たことが、私が協力隊に参加した動機の一つでした。私もCさんと同じく、帰国してしばらくは、日本の学校教育のあり方について違和感を覚えることが多かったのですが、私はその違和感を全部メモするようにしていました。そのメモは、後に学校教育のあり方について考えを深めるうえで、貴重な資料となっています。

C 私は家でわけもなく涙が出てしまっていた時期、受け持っているクラスの生徒から「先生は僕らがよく知らない国に行っていて、音楽の授業をしてきた。『先生』っぽくないですね」と言われたことがあります。それを聞いて、「私はもともと変わった先生だったのだから、無理にほかの先生と同じにならなくても構わないのだ」と思えるようになり、日本の学校教育のあり方について疑問を感じ、立ち止まってしまうことについても、「協力隊に参加したからこそ、新たな見方ができるように変わったのだ」と受け入れられるようになりました。

## 明確な正解がない問題

C 私が協力隊に参加したのは、授業で「音楽は、国境を超えて人が1つになれるツールだ」と話しているのに、自分自身がそういう経験をしたことがないというのはいかがなものかと思っただけでした。そうして赴任すると、実際、言葉があまり通じなくても、音楽を通じて人間関係を築くことができました。

B 音楽は、言葉を超えて「共感」を可能にするものだということなのだろうと思います。言葉がまったくわからない民族でも、その音楽を聴いて「なんだか良いな」と感じるることができる。「言葉」では表せないけれども、「音楽」なら表せるような「心」の状態があるからではないでしょうか。

A 大学でピアノとバイオリンなどを学んだ後、特別支援学校の教員を経て協力隊に参加しました。協力隊では音楽学校でピアノとバイオリンの指導に携わりました。帰国後は、国際協力事業を行う民間団体の職員として国内の支所に勤務するかたわら、定期的に開かれる演奏会に参加し、音楽家としての活動も続けています。

B 大学でクラリネットを専攻した後、中学校の音楽科教員を経験してから協力隊に現職参加しました。協力隊では教育行政機関に配属されて、学校のプラスバンドの指導などに取り組みました。帰国後は中学校に復職しています。

C 大学で琴の研究をした後、高校の音楽科教員を経て協力隊に現職参加しました。協力隊では、中等学校で音楽授業の支援に携わりました。帰国後は復職し、現在は国際理解教育の立案も担当しています。

B 私も国際協力に関する仕事には興味があり、ときどき求人情報を眺めたりしているくらいですので、Aさんがうらやましいのですが、派遣前から転職は考えていたのでしょうか。

A そうです。国際協力の仕事に就くためにも、帰国後は英国の大学院に進学しようかと考えていたので、派遣中も英語の勉強を続けていました。そのため、検定試験も良いスコアが取れるようになり、今の職場への就職につながりました。

## 逆カルチャーショック

A 私は帰国後、オフィスビルの中で一日中パソコンのモニターを見続けたり、自治

C 私の派遣国にはさまざまな民族の人がいて、それぞれが固有の音楽を持っていました。そうしたなかで私は西洋音楽の指導者として赴任したわけですが、あるとき同僚の教員から、「私たちはそれぞれの民族の音楽表現を持っている。それで事足りているのに、なぜわざわざ西洋音楽を教えないといけないのか」と問いかけられました。「西洋音楽の記譜法は世界共通なので、それを学んでおけば、きっと世界中の人とつながることができる」と答えると、「この子どもたちは、あなたのように外国には行かない。ほとんどの子は、ここで生まれ、ここで死んでいく」と言われました。私はとっさに「私のように、外国からここに人がやってくることもある」と答えたのですが、何が正しい答えなのかは今も考え続けています。

A 西洋音楽を教えるという立場で赴任し、その意義を根本から問うような質問を受けるというのは、とても衝撃的だと思います。私も西洋音楽を教える立場で赴任したわけですが、配属先では「音楽発表会」のようなイベントを開く際、かならず現地の音楽や踊りをやる時間を設けるなどしており、「西洋音楽はやり」という雰囲気ではありませんでした。そんななかで、私にも「ここで西洋音楽の記譜法を教える意味がどこにあるか」と考えさせられた経験があります。派遣国の人たちが音楽を学ぶ方法は、YouTubeで演奏を聴いたり、指づかいを見たりするというのが一般的です。配属先で楽譜の読み方を教えるようにしても、「先生、弾いてみて」と言われ、生徒は私が弾くのを見て、指づかいを真似する。そういう生徒に対して、「西洋音楽の記譜法を勉強する意義」について明確な説明ができないので、仕方なく「これからの試験で絶対必要になるよ」などと言っただけのしかありませんでした。

体に「営業活動」をしに行ったりという、派遣前や協力隊時代に携わっていた「教職」とは違うタイプの仕事に慣れるのに、3カ月くらいかかりました。おふたりは現職参加をされ、帰国後も派遣前と同じ教職に就かれているとのことですが、違和感などはあったのでしょうか。

B 日本の教育公務員というのは、「決められた任務を、決められたとおりにやり遂げる」という仕事です。一方、協力隊は自分で現地の課題を見つけ、その解決に向けたプロジェクトを立ち上げたり実行したりすることができず、「自ら企画できるおもしろさ」を知ってしまったがゆえに、「決められた枠の中だけで働く」ことに対して、派遣前には感じなかったようなストレスを感じました。しかも、帰国後は帰りが毎日22時というような忙しさでしたから、逆カルチャーショックは大きかったです。

C 私は派遣国で日本とは異なる学校教育のあり方を見てきたことで、日本の学校教育のあり方について疑問を感じることも多くなりました。例えば「校則」です。「髪の長さ」など、派遣国の学校にはなかった校則が日本の学校にはあり、教員はそれを破った生徒を叱る。そういう様子を見るたびに、「本当に子どもたちのためになっているのか」と考えてしまう。Bさんのおっしゃるとおり、ただでさえ日本の学校教育の現場は協力隊時代とは比べものにならないくらい仕事の量が多いので、そのようにいちいち立ち止まっていたら、時間ばかりが過ぎていき、焦りが募る。そんな状態にストレスを感じていたからなのか、私は帰国後、仕事を終えて帰宅すると、わけもなく涙が出てしまうという日が、1カ月ほど続いてしまいました。

B 「ブラック校則」が日本だけの決まりなのか、世界共通なのかという疑問を持つ

B Cさんの同僚の方の問いかけは、「グローバル化」という名の「画一化」によって、文化の多様性が失われてしまう」という大きな問題につながるものだと思います。日本は明治期に、音楽教育を西洋音楽一辺倒にしてしまった。そのために「琴や尺八は知っているけれど、よくはわからない」という日本人ばかりになってしまい、反動で今、学習指導要領は「日本の音楽もしっかり教えましょう」となっている。私自身は、日本の音楽だけでなく、アジアの音楽など西洋音楽以外のできるだけ広い範囲の音楽を授業で扱おうと努めています。

C 「グローバル化をどこまで進めて良いのか」という問題は、明確な正解がない問題の一つだと思います。そうした問題は、自分が何が正解かを考え、「これが正解だ」と思ったら、それを信じて進んでいくしかない。「学校で西洋音楽を教える意義」について問われたことで、私はそんな考えに行き着きました。高校の教える子たちにも、明確な正解がない問題について、自分なりの正解を考える人間になってほしいと思っています。生徒に「何が正解だ」と考えるか」「なぜそれが正解だと考えたのか」を尋ね、独善的ではない根拠によって正解を追究する力を付けさせるようにしています。

B 「グローバル化」のように、明確な正解があるわけではない問題について、教師は生徒たちが答えを見つけていくためのファシリテーターになるべきだと思います。そのために、私は最近、「コーチング」の勉強を続けてきました。「傾聴」「承認」「質問」によって相手の成長や変化を促す手法です。社会の複雑化に伴い、明確な正解があるわけではない問題は今後、ますます増えていくはずですから、教師のファシリテーターとしての役割もより重要になってくるのではないのでしょうか。



### 活動に役立つアイデア

## 身近なもので理科実験

ナビゲーター = 渡辺悠斗さん  
(バブアニューギニア・小学校教育・2017年度4次隊)

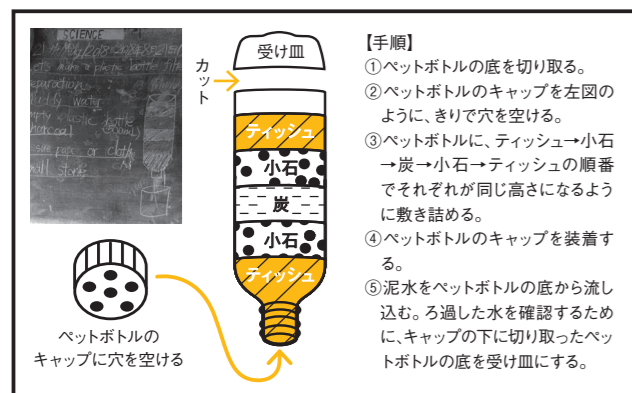
### ペットボトルろ過器のつくり方

水溶液の単元で、混合物を分離する具体例としてろ過器が挙げられていましたが、適当な実験器具が学校になかったことからペットボトルろ過器を導入するに至りました。

身近にある道具を使って学習したことを体験できる楽しさを味わってもらうこと、また泥水内に含まれる混合物の大きさによって、布や小石がフィルターとして作用することを理解してもらうことを目的に行いました。

#### 【材料】

- ペットボトル (500ml)
- ペットボトルのキャップ
- ティッシュ (布切れでも代用可)
- 炭
- 小石
- 泥水
- ハサミ
- きり



—子どもたちの反応—  
茶色い泥水から透明に滴る水に変化したときは、私が想像する以上に驚いて感動していました。

※注意: 実験で使った水は絶対に飲まないでください。

—子どもたちの反応—  
このろ過器をつかった子どもは失敗した原因を炭の少なさと気づき、再度材料を敷き詰め直し、そのあとは成功しました。成功した友だちの様子から学んでもう一度つくり直している姿も見られました。

### 活動に役立つアイデア

## 学校菜園

ナビゲーター = 橋詰真理亜さん  
(ルワンダ・小学校教育・2018年度1次隊)

### 学校菜園をととした体験型の学び

ルワンダの理科の授業では、農具、土、植物、肥料、栄養などが取り扱われているので、学校菜園をととした体験型の学びを取り入れています。

初めに育てたのはサツマイモです。育て方は簡単です。まず学校裏の空地を開墾し、苗を児童に持ってきてもらい、植え付けるだけです。初めての作物は簡単なものにして収穫し、達成感を得ることも重要です。調理したサツマイモを食べている児童の楽しそうな顔を見て私も嬉しくなりました。次にマメを栽培しました。雨期に合わせてマメを撒くとぐんぐん育ちます。耕作や栽培中はなるべく英語で質問するようにしていました。理科を英語で学んでいる児童は、教室内で暗記するよりも、見ながら、触れながら、楽しみながら、勉強できているので、ほかの学校や家庭でも広まってくると良いなと思っています。



### 活動に役立つアイデア

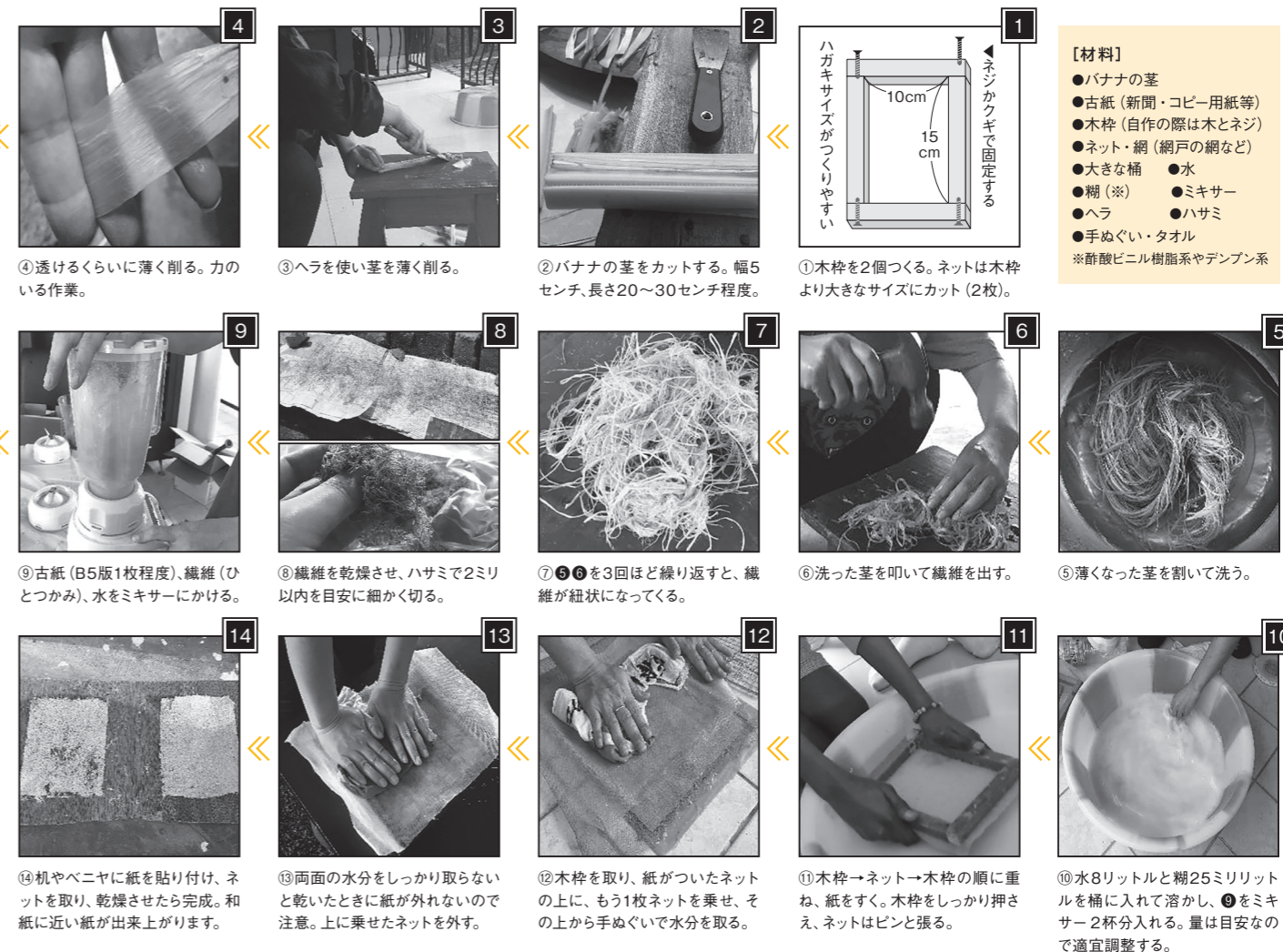
## BANANA PAPER MAKING

ナビゲーター = 細見安里さん  
(ルワンダ・青少年活動・2018年度1次隊)

### バナナツリーを使って紙すき体験

小学校で活動を始めて、児童や先生のノートや紙の使い方がもったいないこと(何も書いていないノートを破って捨てる、新しいが少し汚れたコピー用紙を捨てるなど)が気になり、改善方法を考えました。その結果、紙すきを通して「物づくりの大変さ」や、「紙をつくるたびに森林伐採を行うと環境にどのような影響が出るか」という内容で授業を行えば理解しやすいのではと思い企画しました。ノートやコピー用紙しか知らなかった生徒や先生は、バナナペーパーを見て「これも紙なのか」と興味深く感触や匂いを確かめていました。

配属先では、紙のリサイクルボックスをつくって裏紙を再利用したり、リサイクル工場に送ったりしていましたが、紙すき体験後は、そのボックスに入っていたノートのページが減少。後日、自分でつくりたいという児童もいたので、つくり方の説明書を配布しました。他校のアンケートでは、バナナペーパーを使用したビジネスを展開できるかもしれないという意見や、TTC (Teacher Training College) の生徒からは、将来、「先生になったときに理科の授業で行いたい」という意見もありました。





## 「青年海外協力隊」の呼称などについて商標登録が完了!

JICA海外協力隊のシンボルマーク及び青年海外協力隊にかかると呼称を独占排他的に使用できることを担保すべく、JICAが特許庁に対して商標登録を出願していたところ、2月28日付で審査が完了し、JICA海外協力隊シンボルマーク及び「青年海外協力隊」「海外協力隊」「JOCV」「Japan Overseas Cooperation Volunteers」の呼称が登録されました。

シンボルマークは訓練所ではお馴染みの「隊旗」のデザインです。経緯は不明ですが、1966年10月の隊旗よりオリジナルデザインと矢印の向きが反対になっています。また、訓練終了時に手渡すバッジも隊旗をモチーフとしたもの(下図)を2018年度3次隊から配布しています。

歴史を紐解けば、このシンボルマークは、1965年、「日本青年海外協力隊(現・青年海外協力隊)」の機関誌『若い力』創刊号(1965年7月発行 通巻1号)の発行に際して、表紙デザインを一般募集し、応募作品の中から、協力隊創設の理念に共鳴した八尾武郎氏(1953年より雪印乳業株式会社(現・雪印メグミルク株式会社)でデザイナーを務め、1962年に株式会社YAOデザイン研究所(現・株式会社YAOデザインインターナショナル)を創設)による図案が採用されたことに始まります。八尾氏によるデザイン発表の際、その着想を『論語』の「四方に使いして君命を辱めざるは、士と謂うべし」(子路第13の20より)から得たとの説明があったそうです。当時の協力隊事務局は、そのデザインをもとにした隊旗を作成した際、デザインについて「明るい青年の夢と希望と、そして世界の平和と繁栄に貢献しようという温かい、純心な気持ちを示しており、協力隊事業の誇りを象徴している」と表現しています(『若い力』1966年10月号 通巻8号)。

その後、バッジ、ネクタイピン、ワッペン、シールなど用途に合わせてオリジナルデザインから派生した複数のデザインが考案され、派遣前に隊員個人へ手交されたほか、支援者や希望者に対する広報グッズとして公益社団法人青年海外協力協会(JOCA)から販売・配布されてきた経緯があります。

ところが、JICAが独立行政法人化した2003年以降は協力隊独自のシンボルマークは表だって使用されることは

### 商標登録された呼称・マーク

青年海外協力隊  
海外協力隊  
JOCV  
Japan Overseas Cooperation Volunteers



▲JICA海外協力隊シンボルマーク

なくなりました。しかし、駒ヶ根、二本松の両訓練所においては、引き続き入所式や修了式などの式典、朝礼の際には欠かさずシンボルマークの入った旗が掲揚され、5万人を超えるJICA海外協力隊OB・OGや国内各地の支援団体・個人に慣れ親しまれています。

なお、2018年3月、JICA職員と一般社団法人協力隊を育てる会事務局長が株式会社YAOデザインインターナショナル代表取締役社長八尾戴子氏(故八尾武郎氏夫人)と面会し、隊旗再活用に関する背景、理由、用途などについて説明したところ、「オリジナルデザインとは異なるものの、八尾武郎没後25年となる現在、特段異存はなく、むしろ故人の遺志を継承していただき感謝したい。これからも事業の発展を願います」とエールをいただきました。

このシンボルマークの旗の下、一致団結して、国民的運動である協力隊事業をこれからも力強く推進していきたいと思えます。皆様のご理解とご協力を何とぞよろしくお願いいたします!!!



▲二本松訓練所の朝の集いで国旗などを掲げる様子。左から、隊旗、日本国旗、派遣国の国旗(撮影の日はモンゴル)、JICAの旗

▲バッジのデザインは桑原志織さん(モロッコ・PCインストラクター・2010年度4次隊)によるもの



## 新型コロナウイルス感染症の拡大を踏まえたJICA海外協力隊の対応について

世界規模で新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を踏まえ、JICA海外協力隊に関しては、派遣中の隊員を、2020年3月以降、順次一時帰国させています。また、2020年3月以降に予定していた新規隊員の派遣も大幅に延期しています。

今後の一時帰国中隊員の再赴任及び新規隊員の派遣見通しについては、新型コロナウイルス感染症の発生状況を含む任国の状況も確認の上、検討してまいります。

### 2019年度3次隊派遣時期の変更

3月16日に派遣前訓練を修了し、3月下旬以降に順次派遣予定だった2019年度3次隊は、新型コロナウイルス感染の拡大に伴い、5月中旬以降に派遣が延期されました。

変更後の派遣時期については、国内および派遣国の状況などを踏まえて、4月中に再度調整する予定です。

### 2020年度1次隊派遣前訓練の日程変更

4月23日から7月1日までの派遣前訓練を予定していた2020年度1次隊は、新型コロナウイルス感染の拡大に伴い訓練開始時期を延期しました。

また、訓練前に実施される集合型の技術補完研修は、自己学習や遠隔型の研修に変更となりました。

### 2020年の春募集について

JICA海外協力隊の2020年春募集が終了しました。今年より、一般案件への応募では、希望職種・希望要請をそれぞれ3つまで(二次選考(面接)は1職種)選択できるようになりました。また、募集期間前のプレエントリーも可能になり、個人専用ページで応募から選考結果の確認までできるようになりました。

なお予定されていた「全国説明会キャラバン」は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くが中止されましたが、今回の春募集におけるJICA海外協力隊の一般案件への応募者数は1183人、シニア案件は99人の応募がありました(延べ人数)。

JICA海外協力隊の春募集及び短期第1回募集につきましては、既に応募受付を終了していますが、全世界的な新型コロナウイルス感染拡大の影響により、合格者の選考を中止致しました。

### 短期隊員(一般・シニア)へ遠隔型派遣前訓練の実施

2019年度第2回募集短期派遣合格者と2019年度3次隊語学免除者を対象に、3月23日より駒ヶ根訓練所で予定していた短期合同訓練は、新型コロナウイルスの感染の拡大に伴い、合宿型から遠隔型に変更して実施しました。

### JICAの国内拠点の施設利用について休館や変更のお知らせ

新型コロナウイルスの感染予防のためJICA国内拠点や各施設において、休館や利用の制限などがあります。休館や制限などについては今後変更の可能性がありますので、ご利用前にJICA国内拠点にお問い合わせください。

▶JICAウェブサイト「国内のJICA拠点」  
<https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/index.html>

### 隊歌『若い力の歌』の作曲家をモデルにしたドラマがスタート

青年海外協力隊の隊歌『若い力の歌』を作曲した古閑裕而氏(こせきゆうじ)をモデルにしたNHK連続テレビ小説『エール』が3月30日から放送が始まりました。

現在、『若い力の歌』の直筆楽譜の写しが、二本松青年海外協力隊訓練所内で展示されています。

### 協力隊にかかわるイベント・セミナーなど中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、協力隊に関連するイベントやセミナーが中止されました。中止された主なものをお知らせします。

- 全国説明会キャラバン(12会場、27回)を含む、2020年春募集説明会  
開催予定期間：2月末日～3月末日
- IT職種応募相談会&技術補完研修見学会  
開催予定日：3月7日
- 柔道の技術補完研修見学会  
開催予定日：3月9日
- 天皇皇后両陛下への派遣前ご接見(2019年度第3次隊)  
開催予定日：3月9日
- 帰国隊員への外務大臣感謝状授与式  
開催予定日：3月26日
- 協力隊まつり2020  
開催予定期間：4月25日、26日



# つぶやき

お題 ▶ 洗濯



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

## 1日の始まりは洗濯

任地での私の1日は洗濯からはじまる。日の出時間が遅くなる時期でも、手洗いで洗濯をしていると、徐々に日は昇り、1日の始まりを日の光で感じていた。帰国後の洗濯は洗濯機を使い部屋干し。日の光を浴びながら洗濯をするすがすがしさが懐かしい。

ペンネーム：太陽と生き隊 さん（アフリカ・薬剤師・2018年度派遣）

## ★生活の一部

任地での洗濯は手洗だった。初めは戸惑ったけど数をこなすと慣れて楽しかった。週末に溜まった洗濯をして、干し終わって風になびく、色とりどりの洗濯物たちを見て、「やりきった」充足感がたまらなく好きだった。湿度が低く短時間で乾くので昼寝したら乾いていた。雨期は洗濯するタイミングが難しくてずぶ濡れになったこともあったな。日本に帰った今はそんなことはないけど、やっぱりあの時間が懐かしく思う。

ペンネーム：がっきー さん（アフリカ・公衆衛生・2016年度派遣）

## ★生活必需品

日本では旅行のときとかに持っていく小袋入り洗剤。任地ではこれが一般家庭での洗濯に使われる。大容量の洗剤ももちろんあるけど、1袋単位で買えて、とにかく安い!! 日用品は手に入らないと意味がないから、この国の所得を反映したこの発想はすごいと思う。

ペンネーム：サンミゲル さん（アジア・障害児・者支援・2018年度派遣）

## ★★手洗い隊員の真実

「これ全部洗濯板なしに手で!?!」バケツで手洗い洗濯をすると知ったときの感想だ。洗濯物の汚れを落とすには体力も時間も必要で、洗濯機の偉大さを思い知った。しかし慣れてしまえばこっちのもの。今では億劫だった洗濯は至福の時間に様変わり。洗濯の時間は大音量で歌を歌いながら、唯一無心でせせせと作業ができる時間。洗濯手洗い隊員で、良かった。

ペンネーム：愛洗濯家 さん（中南米・コミュニティ開発・2018年度派遣）

募集中のお題

「掃除」「朝ごはん」「寝具」

投稿は『クロスロード』編集室まで  
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが  
イラストになるかも!?



# JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの活動・仕事を紹介します。

## 柔道で、人と人、国と国をつなげる

柔道を指導・研究・教授してその普及発展を図り、国民の心身鍛錬に貢献することを目的とした団体であり柔道の総本山である「講道館」。柔道家であれば一度は訪れたいと言われるその場所で、協力隊OBの岩永さんが働くことを決めたきっかけは、派遣国ペルーの柔道家たちとの出会いだった。

公益財団法人  
講道館国際部  
いわながけん と  
岩永恵門さん  
(ペルー・柔道・2016年度1次隊)

**柔**道の創設者であり、日本のスポーツ・教育分野を発展させた嘉納治五郎師範。嘉納師範が設立した講道館に勤務する岩永恵門さんは、「師の柔道に対する考え方が自身の働く道、生きる道です」と話す。

「競技だけではなく、柔道で得たもので誰かのためになり、自身も発展していくこと。それこそが『柔道』だと思っています」(岩永さん)

東京にある講道館の本部は、研修施設、道場、資料館などがあり、協力隊の技術補完研修も行う場所。岩永さんは国際部の職員として道場での指導、国内外からの来館者との稽古、通訳に加え、技術補完研修や国際柔道セミナーのコーディネートを担当している。

講道館で働く契機のひとつは、隊員としてペルーで視覚障害者への柔道指導に携わったことだ。派遣当初、岩永さんには競技思考の一面もあり、生徒である視覚障害のある子どもたちに試合を体験させたいと思っていた。手取り足取り指導をするものの伝えることは想像以上に難しく、任期中にそのレベルに到達しないことがわかる。指導方法に悩む岩永さんの傍らで、生徒は帯を結べるようになり、受け身をとれるようになっていった。ある日、生徒に「柔道ができて楽しい」と言われ衝撃を受けた。「努力の過程が柔道であると教わりました」と岩永さん。柔道の本質を知ったことで、柔道と共に生き、いつかペルーのために



2020年に講道館で行われた寒稽古に参加した柔道家たちと岩永さん(後列左端)。寒稽古は130年以上続く伝統行事で、20年は、13カ国、335人の柔道家が稽古に励んだ。東京でオリンピック・パラリンピックが開催される際、講道館は各国代表選手の練習会場となり、岩永さんは来館者のコーディネートを務める予定だという

なりたいたと、帰国した2018年に講道館の研修員になり、20年4月、職員となった。

19年、講道館で行われた東京国際視覚障害者柔道選手権大会に、岩永さんが指導したペルーの成人選手が参加。彼の通訳・サポートを務め、共に稽古をすることもできた。その後、彼はペルーのパラ柔道代表選手として、\*パラパンアメリカン競技大会に出場し、メダルを獲得。もし彼が次のパラリンピックに出場できたらペルー初のパラリンピック柔道選手となり、「ペルー柔道の歴史が変わる」と岩永さん。彼をもっと支援したい気持ちの一方で、社

会人経験の不足を感じる現状では、先輩方に学び、自分を成長させることで精一杯だ。だが、根底にある師範の教え、出会った柔道家たちへの敬意、「柔道が好き」というひたむきな気持ち。それらが、いずれペルーや日本の柔道界を動かす起爆剤となるかもしれない。

\*パラパンアメリカン競技大会…4年に一度開催される総合競技大会。南北アメリカ大陸の国々から障害のある選手が参加する。

●プロフィール: 1993年生まれ、長崎県出身。鹿屋体育大学体育学部武道課程を卒業後、2016年6月、青年海外協力隊員としてペルーに赴任。柔道の普及活動や巡回指導を行う。18年7月に帰国後、公益財団法人講道館にて道場指導部研修員、20年4月より国際部職員として勤務。

## クロスロード

令和2年5月号 [第56巻第4号 通巻656号]  
発行日 令和2年5月1日

編集・発行:  
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局  
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1  
竹橋合同ビル

『クロスロード』ウェブ版は  
以下のアドレスからアクセスできます。  
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



## ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室  
[crossroads@sojocv.or.jp](mailto:crossroads@sojocv.or.jp)



### 以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 派遣国でつくった日本食レシピをお寄せください。



# 隊員めし

おかわり!

自分でつくるおいしい「めし」は活力の源

オープンがない学校でも授業に取り入れることができ、枝採しや火おこしなど環境教育隊員と協働で授業をすることも可能だと思い、「バウムクーヘン」をつくることにしました。授業の際は、「ドイツ由来のお菓子で『木(バウム)のケーキ(クーヘン)』という意味です。日本でもポピュラーなお菓子です」と紹介。授業以外にも、バーベキューをするときに焼いていました。焼き上がりまで約1時間かかるため、ひとりで焼くのは心が折れます。みんなで調理過程を楽しむ料理です。現地の子どもたちにつくってもらうときには「力を合わせて!!」と伝え、楽しんでもらいました。棒を回している子どもたちの周りの大人やほかの生徒が「Turn it! Turn it!」と即興の歌とボディーパーカッションとで参加者全員で盛り上がりつつ楽しかったです。切ったときに年輪の輪っかを見せると「すごーい」と喜んでくれました。



### 今月の料理人

きたわき あき  
北 脇 藍 紗 さん (ジャマイカ・家政・生活改善・2018年度2次隊)  
●活動内容: 農業系の青少年育成団体における生徒へ製菓授業や講師の教授法改善。

## オーブンいらずのスイーツ クルクル回してバウムクーヘン

### 材料(小さく切り分けて10人分)

卵…4個  
砂糖…160g  
ココナツオイル※…200g(約230ml)  
小麦粉…240g  
ベーキングパウダー…小さじ2  
※ほかのオイルでも大丈夫ですが、シンプルな配合なので香りがやくせが少ないものがおすすめです。

### つくり方

- ①小麦粉とベーキングパウダーを合わせてふるいでふるう。ふるいがなければ、ポリ袋に入れ、口を閉じフリフリすればOK。
- ②卵をボウルに割り入れ、泡だて器で混ぜる。
- ③砂糖を加え、擦り混ぜる。
- ④混ぜながらオイルを少しずつ垂らす。
- ⑤①を半量入れ、ゴムベラなどで切り混ぜる。粉気が残っている状態で残りを入れ、粉が完全に見えなくなるまで切り混ぜる。
- ⑥真すずぐで直径3〜5センチくらいの枝(または、木の棒、丈夫な紙の筒など)にアル

ミ箔を巻く。これに⑤の生地をかけ、たき火の上で回しながら焼く。

- ⑦生焼けにならないように表面をしっかり焼く。生焼けだと回している途中に重さで崩壊するので注意。速く回しすぎると全然焼けず、遠心力で生地が飛び、遅すぎると生地がたき火に落ち、焦げる。生地が下に垂れないペースで回すのがポイント。
- ⑧表面が焼けたら、生地をかけ、再び焼く。
- ⑨生地がなくなるまで繰り返したら完成。

※雨が降ったときには、生地をバウンドケーキ型に入れ、オーブンで焼いても(220℃で15分→180℃で50分、途中、焦げそうだったらアルミ箔をかぶせる)おいしいです♪



⑥が⑨になるには約1時間かかる。後半は重たい  
⑨枝から外しにくいときは縦半分カット



### 今月号の表紙 セネガル



たかはし あき  
文=高橋 旺子 さん  
(体育・2017年度1次隊)

私は体育授業が実践されていなかった任地の小学校で、その活性化に取り組みました。勉強は不得意だけれども、運動なら得意という子にとって、体育授業は「自分が輝ける場所」でもあります。任地で運動をする機会が特に少なかったのは女の子たち。表紙の写真は、体育授業の活性化を目的に行った運動会で、騎馬戦に熱中する6年生の女の子たちです。運動をしているときの子どもたちの生き生きとした表情は、私の活動の最大のモチベーションでした。  
※高橋さんの活動の詳細は8〜9ページで紹介しています。